

Hitotsubashi
Quarterly



世界を解く

【愛でる】

《メッセージ》
新入生へのメッセージ

《対談》
日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？
弁護士

申村直人氏
一橋大学副学長 山内 進

《座談会》
進化する大学
ベテラン職員が見た
この40年間

《対談》
一橋の女性たち
ティファニー・アンド・カンパニー・ジャパン・インク
ディレクター、マーケティング

島田さち子氏
国際企業戦略研究科(ICS)准教授 大園恵美

個性は主張する
国立情報学研究所情報社会相關研究系 教授

新井紀子氏

《特集》
地球の風 地域の風
坂元醸造株式会社代表取締役社長

坂元昭宏氏

新入生へのメッセージ

- 1 杉山武彦学長
- 2 商学研究科長・商学部長 / 山内弘隆、経済学研究科長・経済学部長 / 江夏由樹
- 3 法学研究科長・法学部長 / 大芝 亮、社会学研究科長・社会学部長 / 渡辺雅男
- 4 国際企業戦略研究科長 / 竹内弘高、言語社会研究科長 / 佐野泰雄
- 5 法科大学院長 / 村岡啓一、国際・公共政策大学院長 / 渡辺智之



新任者挨拶

- 7 募金・事務局改革担当副学長 / 金田正男
- 8 法学研究科長・法学部長 / 大芝 亮
- 9 国際・公共政策大学院長 / 渡辺智之
- 10 留学生センター長 / 鶴田庸子

特集

- 11 日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？
- 12 対談
弁護士 / 中村直人氏 VS 山内 進副学長
～過去の判例にとらわれず智慧を絞って新しいルールをつくっていく時代がやってきた～



連載企画

- 18 世界を解く 第11回テーマ「愛でる」
- 20 数学
- 22 フランス文学
- 24 ドイツ音楽文化



進化する大学

- 26 座談会
～ベテラン職員が見たこの40年間～
- 32 研究室訪問 chat in the den

連載企画

- 36 対談 一橋の女性たち
ティファニー・アンド・カンパニー・ジャパン・インク ディレクター、マーケティング / 島田さち子氏
国際企業戦略研究科(ICS)准教授 / 大園恵美
- 39 個性は主張する One and Only One
国立情報学研究所情報社会関連研究系 教授 / 新井紀子氏



Love of Culture

- 45 「展覧会カタログ」

Book Review

- 46 『ミステリーを科学したら』
- 47 『英語の感覚・日本語の感覚 ことばの意味 のしくみ』

特集

- 48 地球の風 地域の風
坂元醸造株式会社代表取締役社長 / 坂元昭宏氏



Campus Information

- 54 一橋大学基金ご寄付者のご芳名
- 56 マイクロソフト社協賛国際シンポジウム、「知財の法と経済学」を開催しました
本学キャンパスが、TBSドラマ「エジソンの母」の撮影ロケ地として使用されました
- 57 第3回ホームカミングデー開催のお知らせ



学長 杉山武彦

一橋大学ならではの ハード、ソフトの資源を 利用し尽くしていただきたい

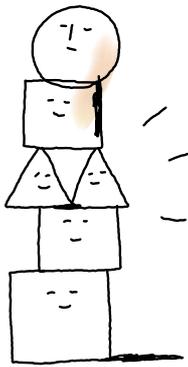
大学という組織の強みは、フレッシュかつ大きな潜在力を秘めた若い人材が毎年加わってくることです。その若い人材に、これまでとは違う世界に入ってきたのだということをまず自覚してほしいと思います。

高校時代には、生徒は定められた枠組みの勉学生活のなかで、ほぼ共通の素養を身につけることを求められます。むしろそれが、のちの広い世界への飛躍の踏み台になります。一方、大学では、学生は自由な選択を積み重ねます。ただし、結果には自分自身で責任を持たなければなりません。「自由選択と自己責任」がキーワードなのです。

一橋大学のキャンパスには、さまざまな資源が埋まっています。切磋琢磨することで互いに成長できる友人や先輩、求めれば求めるほど多くのものを与えてくれる力を持った教員たち、世界でも有数の内容を誇る図書館……。留学制度や奨学金など各種の制度も充実しています。ソフト、ハードを含めて素晴らしい資源に恵まれているのです。積極的にこうした資源を掘り出して活用してください。

大学院生の皆さんは、それぞれが確固たる研究目的を持っているものと思います。学部学生の場合と同様、活用すべき資源は十分に整っていますから、それらを存分に利用し尽くしてください。学内で繰り上げられるゼミナールやワークショップは、それぞれがまさに日本の知識財の生産現場にほかならないのです。生産現場で楽しく厳しい知の真剣勝負に取り組んで、大学の知識創造に貢献してくれることを願っています。

多く求めれば多く与えられる
教員との真剣勝負の場



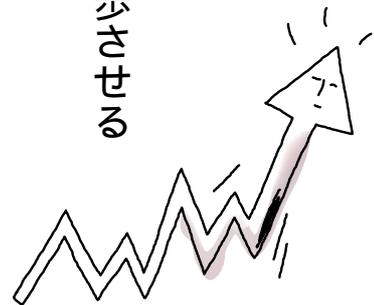
商学研究科長・商学部長
山内弘隆 Hiroataka Yamauchi

大学では自分から求めないと、何も与えられません。キャンパスライフも勉強も、多く求めれば多く与えられるものです。商学部はそれに応えられるようにカリキュラムも変更しています。例えば、教員が総出で行っている学生生活に大きな影響を及ぼすような導入ゼミ。専門書を読み論文が書けるよう指導を行い、基礎学力を伸ばす支援をしています。それに応えてほしいですね。導入教育の特徴は、ビジネスを体系的に学ぶことです。概論科目で商学にまつわる社会科学の骨格を学び、教養科目で関心の深い勉強をしてもらいます。

人生の中では短い4年間ですが、人生の目的を探し、自己設計能力を身に付ける重要な期間でもあります。まずリベラルアーツを学び、幅広い視点を身につけてください。社会的価値の実現には、意志の強さと達成能力が要求されます。

次に大学院生に。経営学の第一線で活躍している先生方が、独自のMBAのモデルを創り上げてきました。一生のうちで最も勉強する2年間にしてもらいたいですね。教員も学生と日々真剣勝負をする覚悟です。また、研究者養成コースでは、世界レベルの研究者の育成に向けて5年間の研究しやすい環境づくりを進めています。世界に羽ばたく夢を持って来てください。(談)

教員との親密な
学問的関係のなかで、
知のレベルを格段に進歩させる



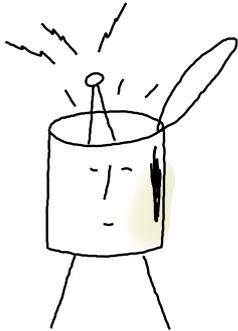
経済学研究科長・経済学部長
江夏由樹 Yoshiki Enatsu

経済学はモノやサービスの生産、交換、分配、消費などの問題を、広い視野から、分析的に研究していく学問です。経済学を学ぶということは、現代の政治や社会の問題をその内側から捉えることにもなり、その研究対象は大きな広がりをもっています。また、歴史的な視点からそれらの問題に迫ることも可能となります。そうした知の体系を、本学の経済学部・経済学研究科で学べることは、皆さんにとって、大変素晴らしいことだと思います。また、本学部・研究科では文科省のCOEや各種科研費などの補助を受けて、最先端の研究を組織的に行っており、その成果は教育活動にも反映されています。

経済学の入門から大学院の専門レベルの段階まで、階段を1歩1歩昇るように、勉強を進められるカリキュラムを有しているのも、本学部・研究科の特長です。これにより、勉強をどんどん進めていくことが可能となりますから、学部に入学生人は、是非、5年で修士課程を修了できる「学部・大学院5年一貫教育システム」を利用し、大学院まで進学する可能性を考えてみてください。さらに、修士から博士課程へという道も開かれています。

一橋大学では、学問のプロに学ぶことができます。ゼミなどの少人数教育の場を利用して、教員と親しく接する機会にも恵まれています。教員と一緒に勉強するなかで、学問の「奥の院」に迫るような話も聞けるでしょう。そうしたなかで、皆さんの知のレベルは確実に進歩していくと思います。(談)

留学しようかどうか迷わず、
だまされたと思って
留学試験を受けよう



法学研究科長・法学部長
大芝 亮 Ryo Oshiba

ご入学おめでとうございます。まず大学の新生へ。高校までの勉強と違い、大学での勉強に最初はとまどうかも知れませんが、大学での講義等にまじめに取り組んでください。教員も一生懸命講義の準備をしていますので。このほか、みなさんには、3つのアドバイスをしたいと思います。

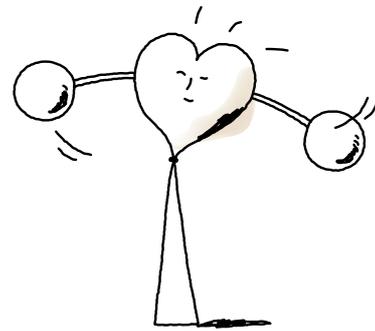
第1点目は、できるだけ多くの本に目を通してください。最初はじっくりと読まなくても構いません。面白そうな章だけをつまみ食いでも結構です。ただし、気に入ったら、2度、3度読んでください。

第2点目は、学内・学外のシンポジウムやセミナーにもできるだけ参加してみてください。いろいろな問題があることに気づきます。学生セミナーなどにも積極的に参加して、他流試合もしてきてください。

第3点目は、本学では留学制度が充実していますので、ぜひ、チャレンジしてください。留学しようかどうか迷っていますという相談をよく受けますが、私は「だまされたと思って留学試験を受ける」といいます。留学試験に通ってからいくかどうか迷えばよいわけです。ちなみに、今までの学生は、留学試験に合格すると全員留学に行っています。

大学院の新生へ。安直なりアリストにならず、社会的使命感をもって勉学に励んでください。私の専門とする国際政治学のことばでいえば、分析においては現実主義者であっても、構想はリベラリストの発想で、ということです。(談)

受験モードを脱して
自分を解放し、
チャンスを受け止める
感受性を磨こう



社会学研究科長・社会学部長
渡辺雅男 Masao Watanabe

中国の清華大学、中国社会科学院との共催で、国際シンポジウムを今年5月に計画しています。タイトルは、「中国の格差、日本の格差 格差社会をめぐる日中共同シンポジウム」。次世代の交流の推進母体となる若い研究者を十数人招聘します。

このシンポジウムは、社会学部が過去2年間行ってきた連続市民講座とタイアップして開かれます。市民やマスコミに向けて開かれた社会学部の国際学術活動の一環です。そもそも一橋大学のアイデンティティの基礎は市民社会にあります。格差イコール不平等ですが、平等をめざす市民社会の原理で格差克服の方策を考えたい。このシンポジウムの狙いを一言で言えば、そうなりましょう。

多くの人にこうした取り組みを説明すると、異口同音に「学生は恵まれている」と言ってくれます。ところが当の学生には、こうしたチャンスにどん欲に食らいついてくる好奇心が欠けているように見えてなりません。受験競争で受け身にならされてしまっているようです。

学部の新入生には受験モードを脱して自分を解放してもらいたいものです。すると、いままでとは違った世界が広がってきます。研究科の新入生の場合は、近年の大学院教育の改革の中でさまざまなチャンスが広がっています。それをもっと積極的に利用してもらいたいですね。(談)

大学に頼るな、自己研鑽せよ！
貴重な4年間で
ムダにしないために



国際企業戦略研究科長
竹内弘高 Hiroataka Takeuchi

日本は世界から取り残されてしまう
こんな危機感があります。いま世界は、グ
ローバリゼーション3.0の時代に到達した
といわれています。国家のグローバル化（G1.0）、企業の多国
籍企業化（G2.0）を経て、個人のグローバル化時代が
やってきたのです。フリードマンは『フラット化する世界』で、
国境に関係なく一番有能な人に「JOB」がいくと言っています。

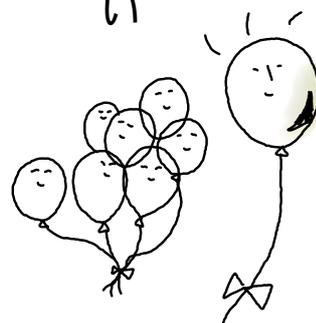
この激しい競争社会にあって、日本の学生はグローバル化
から取り残されてしまっています。「キャプテンズ・オブ・イ
ングストリー」が、日本から台頭していません。

学部時代に相当な実力を身につけないと、世界での競争に
加わることはできません。厳しいセルフ・モチベーション
によって、リベラル・アーツなどグローバルに通用する資質
を身につける重要な4年間なのです。

東芝ではトップが自ら改革の大ナタを振るっています。任
天堂や日本電産は特定の分野にフォーカスして世界でもユニ
ークな存在になっています。時代は「キャプテンズ・オブ・
イノベーション」を求めているのです。

大学に頼るな、自己研鑽せよ！この意識が、世界で通用す
る自分を創り上げてくれるでしょう。（談）

若さには孤独こそ似つかわしい



言語社会研究科長
佐野泰雄 Yasuo Sano

新たに大学に入学した若い人たちを待
っているのは群れ集う誘惑です。確かに、
それまでの仲間たちから切り離され、孤
独が負担に感じられる環境に置かれれば、集団に自分を溶か
し込むことは、甘い蜜のように曇惑を放つでしょう。しかし、
大学では孤独こそ選んでほしいものです。なぜなら、若い
人たちが群れ集う姿は醜い。若い人には孤独が似合うのです。

だからといって、「孤立」を勧めているわけではありません。
人々と交わることはとても重要で意味のあることです。
しかし、交わりながらも人に甘えず、いつも自分の孤独を懐
に温め、大学という知的アリーナで自分の言葉を磨いてくだ
さい。この場合、言葉を磨くとは、過不足のない抑制のきい
た効果的な言葉遣いを身につける、というごく当たり前のこ
とを意味しています。

このようにして、平生から自己表現力を客観的に意識す
るようになると、他の人々が発する言葉、ひいては、文学、
映画、音楽などの作品に対する感受性もより磨かれるよう
になるかも知れません。こうした自己鍛錬が成熟へと繋が
ります。学部での人間的成熟を経る過程で、作品の研究に興
味を持ったのなら、言語社会研究科への進学もあり得る選択
肢でしょう。（談）

基礎科目の学習を通じて
リーガルマインドを身につけてほしい



法科大学院長
村岡啓一 Keiichi Muraoka

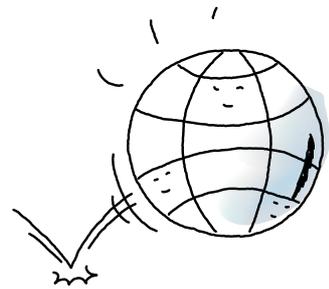
一橋大学法科大学院では、将来の法曹界の各分野でリーダーシップのとれる法律家の養成に努めており、過去2回の新司法試験では全国トップクラスの好成績を収めています。

最近、ロースクール創設準備が進んでいる韓国の大学が、本学法科大学院の名声を聞いて、視察にきています。法学部の出身でない者(未修者)でも3年間の履修で法曹への道が開かれる一橋の法学教育モデルに関心を持たれているのです。

法科大学院では「理論と実務の架橋」を目指しています。法曹を目指す学部生には、法律を応用する以前の基本となる理論、なかでも憲法、民法、刑法などの基礎科目の基本的知識を確実に習得してもらいたいと思っています。また、「何をしたいか、法律家になりたいのか」を常に自らに問い、自分の理想とする法律家の明確なビジョンをもつことを心がけてください。目標が明確であれば、学部の4年間で有意義に過ごすことができるでしょう。加えて、法曹に不可欠な法的に物事をみる考え方、すなわちリーガルマインドは一朝一夕に身につくものではありませんから、学部時代の学習を通じて法律家のように考え、表現することに努めてください。それさえしっかりできていれば、法学部出身者(既修者)を対象とした法科大学院の2年間の履修で法曹への道が開かれます。

一橋大学出身者の2008年度の法学部法科大学院合格者に占める割合は23.6%に過ぎません。もっと多くの一橋生に入ってきてもらいたいですね。(談)

グローバル人材となるための
4つの前提条件



国際・公共政策大学院長
渡辺智之 Satoshi Watanabe

国際・公共政策大学院(IIPP)には、新卒や社会人の多彩な人材が入学してきます。先日、入学予定者と話をする機会がありましたが、元気のいい人が多く、頼もしい限りです。迎えるIIPP側の中身も、公共法政、グローバルガバナンス、公共経済、アジア公共政策と多様です。そこでの学習の実を挙げてもらうために、次の4つの理念を打ち出しています。

第一は、「専門知識を体系的に身につける」こと。大学院での勉強を将来のキャリアに役立てるには、核となる知識を集積的・体系的に学ぶことが欠かせません。

第二は、インターンシップやコンサルティングプロジェクトを積極活用して、「実践的に学ぶ」こと。講師陣やゲストに第一線で活躍する実務家にも参加してもらっています。

第三は、「専門分野と併せて他分野への土地勘を持つ」こと。共通科目を必修にしている理由はここにあります。

第四は、「国際的な視点を持つ」こと。留学生比率はこれまでも高いのですが、本年10月にはグローバルガバナンス分野でも英語のみで修了できるコースを開講する予定です。今後とも国際的な展開を目指していきたいと考えています。

この4つを身につけることは、高度専門職業人としてグローバルに活躍するための前提条件といってもいいでしょう。(談)

新任者挨拶

募金・事務局改革担当副学長

Masao 
Kaneda

法学研究科長・法学部長

Ryo 
Oshiba

国際・公共政策大学院長

Satoshi 
Watanabe

留学生センター長

Yoko 
Tsuruta

教育研究水準の飛躍的向上に向けて 一橋大学基金整備と事務局改革を推進

新任挨拶

Masao Kaneda



募金・事務局改革担当副学長
金田正男

副学長としての私の主なミッションは、一橋大学基金整備と事務局改革の2つです。

一橋大学では、教育、研究の両面で世界のトップレベルの大学経営を実現するための資金的裏付けとして、「一橋大学基金」を設立しました。この基金の活用により、奨学金

や海外留学支援、留学生の招致といった学生支援、専門職大学院の充実、キャンパスIT化の一層の推進、研究活動支援、国際交流活動の活性化、社会貢献……など、魅力ある大学づくりに欠かせないプログラムを実施する予定です。基金の目標は100億円で、幅広い募金活動により平成23年3月までに達成する計画です。

募金活動では、一橋大学の現状とビジョンを訴え、何をもって社会に貢献しようとしているかを理解していただいています。

募金対象は、OB・OGを中心とする個人と法人。個人については、主に如水会からアプローチしていただいています。また、OB・OGの会合には学長、副学長が直接出向いて支援のお願いをしています。法人については、約3700社に依頼文書をお送りし、如水会に設けられた募金支援会の方々の協力を得て、極力訪問して協力を要請しております。ちなみに昨年は、約400社の企業を訪問、今年は約600社訪問する予定です。景気の減速傾向もみられるようになってきたので、できるだけ早期に訪問したいと考えています。一方、募金期間は定められますが、それにこだわらず長期的な視点で地道な活動を行い、多くの企業と一橋大学との関係を深めていくつもりです。

大学は、「学生」「教員」「職員」のトライアングルで成り立っていますが、優秀な教員や学生のパートナーとしての職員集団を構築し、厳しい大学間の競争に打ち勝っていかなければなりません。いくら基金で寄付金を集めても、それを企画し運営する事務局スタッフが脆弱では目的を達成することができないのです。事務局改革を加速しなければならない理由はここにもあります。

事務局改革には、組織面の改革、業務の流れの合理化、働く職員のモチベーションアップが必要です。

組織面では、すでにグループ制の導入や、業務の繁忙に合わせ人員再配置を行っていますが、更に縦割りの業務を解消し、関係セクションの連携強化を行っていかなければなりません。

業務内容の改善については、業務の見直しによる業務のスピードアップと合理化を更に進めるとともに、それに応じた組織面の改革も必要です。更に、教員の研究をサポートするアカデミックスタッフの採用も課題です。

法人化前は国家公務員として定められた仕事をキチンとこなしていけばよかったかもしれませんが、現在は「企画力+正確な実行力」が求められています。

職員のモチベーションと資質の向上に向けて、様々な取り組みが必要ですが、一昨年から職員の長期・短期海外派遣制度を設けています。さらに、私立大学や民間企業などとの人事交流も必要です。また、昨年度からは目標達成と職務行動の二つの側面による個人評価の試行を行っており、特に問題がなければ来年度から「仕事の業績に応じて評価される」仕組みが本格始動します。

一橋大学基金、事務局改革ともに、その実現には多くの困難が伴いますが、精一杯その達成に向けて努力していきます。(談)

グローバル社会との連携を強化し 世界的にも評価される大学を目指す

新任挨拶

Ryo Oshiba



法学研究科長・法学部長

大芝 亮

法学研究科は法学部、法科大学院や国際・公共政策大学院という専門職大学院、そして研究者養成を主目的とする修士・博士課程の教育に取り組んでいます。

オープン・キャンパスで必ずといっていいほど質問がでるのは、法科大学院に進むには法学部に入らなければならないかということです。法科大学院には未修・既修の2つのコースがあり、必ずしも法学部出身でなくても、法科大学院に進学することができます。法学部の学生にも、法科大学院の受験にばかり気を取られるのではなく、ゼミ・講義できちんと学習してもらいたいと思います。せっかく学部間の垣根の低い一橋大学にいるのですから、ぜひ、隣接分野の科目も積極的に履修してほしいと思っています。

法科大学院や国際・公共政策大学院といった専門職大学院の発想は、実学を伝統とする本学ではなじみのあるものです。安直なリアリストではなく、社会的使命感をもって問題解決・社会改革に取り組む人物になることをめざしてください。

標準的には修士2年、博士3年という期間の勉学が必要な大学院（おもに研究者養成）進学に慎重な学生は少なくありません。大学のクオリティは、教育内容や社会的連携成果とともに、やはり研究者の養成と研究者の質によりますから、優秀な学生が修士・博士課程へ進学しやすくなるような環境・体制づくりが必要です。社会人の大学院への環流ルートを太くする措置も考えたいと思っています。

以上のいずれにおいても、日本語・英語によるディベート能力、ライティング能力の向上にも従来以上に力をいれたいと思っています。自分の見解を相手に押しつける必要はありませんが、「一理ある」と相手に理解してもらって説得力は身につけなければなりません。

研究については、従来の蛸壺的な研究体制を改革するためにも、大学の研究科などの組織を単位とする研究が競争的資金の導入により促進されました。法学研究科でも21世紀COEの研究助成金により、教員の横のつながりが強くなり、博士課程を中心とする若手研究者への支援も行われました。こうした資金を活用すれば、博士課程大学院生に対する授業料免除や奨学金制度の充実、海外調査研究や海外留学の機会増大につなげることができるでしょう。

最後に、グローバル化の時代においてはグローバル社会との連携が不可欠です。そしてこれが、ひいては世界的にも評価される大学につながるものと確信しています。国立キャンパスの美しさは世界的にも決してひけをとるものではありません。しかし、大学とは建物ではありません。伝統を持ち、法学部・法学研究科および他のすべての部局に帰属する一橋大学の教職員・学生により構成されるコミュニティです。皆で一緒にグローバル社会をリードする一橋大学を創っていきましょう。（談）

修了のみで何かがあるわけではない
パイオニア精神で切り開く気概を持って！

新任挨拶

Satoshi Watanabe



国際・公共政策大学院長
渡辺智之

働き盛りの貴重な1、2年間の時間を投資するには、相当なリターンが期待されないと難しいでしょう。その期間、勤務していたなら、オン・ザ・ジョブ・トレーニングを受ける機会もあったわけですから……。

ところが、ロースクールは少し別としても、日本で専門職大学院が根付くかどうかは、正直いってまだわからない状況です。専門職大学院が社会的なニーズに合致しているか、学生にキャリア形成に役立つ教育を提供できているかの検証も、まだこれからの段階といってもいいでしょう。

もちろん教員はインテンシブかつ丁寧に指導しています。しかし、入学してくる学生が厳しい自覚の下に国際・公共政策大学院（IPP）の提供できる機会を吸収し尽くすような勢いでしっかり学び、将来のキャリアに生かそうという強い決意と持続的な努力がない限り、大きなリターンを得ることは難しいのです。

一方で、世界はもとより日本でも、大学院レベルの教育を受けた人材へのニーズは高まりつつあるはずですが。実践教育と学生の意欲、社会のニーズをつなげていくように工夫するのは、大学院側の役割ですが、卒業生や学生自身が専門職大学院の存在意義を、パイオニアとして身をもって知らしめるような気概が必要になるのです。今後一生続く仕事と勉強に向けて、前向きに力強く取り組んでもらうことを期待しています。

日本の現状では、大学院を出たからといって就職が必ずしも有利になるというわけではありません。しかし、国際的には社会科学系でもマスターを取ることが当然と

いう分野が数多くあります。日本でも、徐々にではあっても、修士まで取得することが実社会に、もっと評価されるようにしていきたいものです。

考えてみれば、高度成長期のように大学を卒業すれば一定の待遇やルートが待っていたのは、むしろ、例外的な時代だったのかもしれませんが。現在ではそのような条件は満たされていませんし、大学院を修了したら何か待っているというわけでももちろんありません。自ら動かないと何も獲得できないのです。

しかし、逆にいえば、これまでとは違った様々なチャンスに恵まれている時代であるとも言えます。コツコツと努力を継続し、長い目で物事を考える習慣を持つ。それと同時に、状況に機敏に反応する思い切りのよさを身に付ける。この両者は決して矛盾しません。むしろ両方がないと実務でキャリアを積んでいくことができません。

変化の激しい不安定な時代です。社会に出て、高齢化や格差問題などさまざまな困難な状況があるなかで生きがいを持って働いていくには、知識や技術もさることながら、フロンティアスピリットを持って積極的に挑戦していこうという気概が必要不可欠です。また、それができる人材に入学してきていただいていると、確信しています。

IPPには、アジア諸国の公共政策の現場からの留学生も派遣されています。アジアでは現在、高度な経済・投資の相互交流が起っています。アジア諸国・諸地域間で、水平的ネットワークが形成されつつあるのです。留学生も含めて、そのようなアジア経済圏の仲立ちとなれるような人材、グローバルに活躍できる人材を育成していければと思っています。（談）

日本語教育、相談機能をより一層充実させ、 留学生が安心できるセンターづくりを心がける

新任挨拶

Yoko Tsuruta



留学生センター長
鶴田庸子

一橋には500人を超える留学生が学んでいます。全学生の8パーセント強に当たる人数で、2007年10月の留学生ウェルカムパーティーで杉山学長が、留学生はゲストなのではなく、一橋大学の重要な構成員であるとおっしゃっていますが、留学生センターもそのことを常に心に留めて留学生のサポートに当たっていかなくてはいけないと思っています。

ひとくちに留学生といっても、彼らが一橋で達成しようとしている目標は多様です。例えば、短期間（1年間）の滞在が基本である、交流協定大学からの交換留学生と、学部あるいは大学院で学位を取得することを目標にしている留学生（正規生）とでは、留学の目的が違うわけですから、彼らが私たちに求めるサービスも質・量ともにさまざまです。センターの基幹業務は、留学生に彼らにとって学習言語である日本語の運用力を高めてもらえるように日本語教育の授業を行なうこと、そして、より広く、彼らの勉学と生活全般が円滑・快適に進むようサポートをすることですが、留学生ひとりひとりのニーズに的確に応えられるよう、センターの日本語教育部門と相談部門が一丸となって、なおいっそうきめ細かな支援をめざします。

また、センターとしては留学生と国際交流をとりまく状況の変化にも敏感に対応していきたいと考えています。かつては私立大学に限られていた、＜大学は学生に異文化適応のための経験の機会を提供する責務がある＞という認識が今では国立大学でも一般的になっています。

この流れに対応して、センターはパイロットプロジェクトとして2006年度に短期海外研修プログラムを大学執行部の支援を得て実施し（豪州モナシュ大学）、2007年度には派遣先を新たに一校追加して継続実施しています（モナシュ大学および北京大学）。そもそもセンターは、留学生、特に大学院進学を目指す留学生に日本語の予備教育を行なうことを主たる目的として設置された機関で、現在でもそれを基幹事業とするものであることに変わりはありませんが、今後は、留学生支援だけでなく、こうした日本人学生を対象とする大学のサービスにも貢献できる組織でありたいと考えています。

さらに、国際交流の要素をもつ試みは学外から大学にもたらされる場合もあります。例えば、2007年には経済産業省が「アジア人財資金」プログラムを打ち出して話題になりました。こうした学外からの要請や打診は今後もあると考えられ、そのなかで、留学生教育、留学生支援、国際交流といった、センターが一翼を担える領域にかかわる案件が発生した場合には責任をもって積極的に加わることができるように、情報収集、体制整備などの準備を日頃から行なっておかなければいけないと感じています。

そして、最後に、じつはこれがいちばん大切なことなのですが、センターは留学生たちにとって親しみのもてる、頼りがいのある場所でありたいと思いますし、また、留学生支援に興味を持って活動してくれる日本人学生（ASSIST、HEPSAのメンバーなど）国際交流全般に関心をもつ日本人学生が気軽に訪れてくれるような、居心地のよい場所でありつづけていきたいです。（談）



日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

2006年より新会社法がスタート。産業界も変革を余儀なくされています。

そこで今回の対談では、企業法務の第一線で活躍している中村直人弁護士に登場していただきました。

具体的なエピソードを交えた企業法務の実際から、期待される新しい弁護士像、

学生へのアドバイスまでを語っていただきました。

弁護士

中村直人氏

中村・角田・松本法律事務所パートナー

1960年1月神奈川県生まれ。1982年10月司法試験合格。1983年3月一橋大学法学部卒業。1985年4月司法研修所卒業、第二東京弁護士会登録、森綜合法律事務所所属、1998年4月日比谷パーク法律事務所開設、パートナー、2003年2月中村直人法律事務所開設（現中村・角田・松本法律事務所）。日経ビジネスの「企業が選ぶ弁護士ランキング」総合部門で4年連続トップとなる。著書は、『M&A防衛法』（共著/中央経済社）など多数。

一橋大学副学長

山内 進





過去の判例にとらわれず智恵を絞って 新しいルールをつくっていく時代がやってきた

日経ビジネスの「2007年版企業が選ぶ弁護士ランキング」^{注1)}で、
2位を大きく引き離して堂々の4年連続トップを飾っている中村直人弁護士。
日本経済の変革期を身をもって体験しているだけに、山内副学長との対談のなかから、
さまざまなエピソードが飛び出し、新しい時代の弁護士像が見えてきました。
とりわけ信念の重要性やクライアント志向で智恵を絞ることの重要性は、
どの分野でも重要なことといえるでしょう。

学者の研究成果を現場で通訳する 企業の水先案内人

山内 4月には新入生も入学してくることで、法曹界で活躍するというのはどういうことかを分かってもらいたいと思って、中村直人弁護士にお出でいただきました。弁護士の仕事は幅広いですから、最初に中村弁護士の考える弁護士像や実際に取り組んでいる仕事についてお聞きしたいと思います。

中村 弁護士は、企業法務といわゆる人権派とに大別されます。私を含めて企業法務畑の弁護士が増加しています。自分で腕を磨けばお客様がそれを評価し、個人の弁護士に多くのお客様がついてくる。これが企業法務のやりがいです。

現在は法律も著しく変化している時代です。その流れに企業はどう対応したらいいか。新しい価値観をどう生み出していくか。時代の先にある新しいものを取り入れて、企業の水先案内人になるのが弁護士なのです。

山内 その点では、学者とは随分違いますね。

中村 法律を学術面から研究する学者の研究成果を、現実に役立てるための通訳のような役割といってもいいかもしれませんね。

山内 最初から企業法務を目指していたのですか。

中村 法学部に入ったときは、何となく司法試験を受けてみようと思っていました。途中で目指すのをやめようかとも思ったのですが、三商ゼミに参加して法の運用の面白さを知り、逆にやる気ができました。1つのテーマを三大学がそれぞれ違った学説に

注1)

日経ビジネス
2007年9月10日号より引用

準拠して討論するというスタイルです。こうして、現実のキャリアとして法律を仕事にしたいと考えるようになりました。実際に企業法務の本当の面白さを知ったのは、弁護士事務所に入ってからですね。

山内 法学部の学生は、司法試験を目指して紆余曲折するケースが多いですね。法科大学院ができるまでは、1～2年生のときはあまり特別の試験勉強はせず、3年生から司法試験を目指して勉強を始めて留年して合格するというのが、オーソドックスなスタイルでした。中村さんが弁護士事務所に入ったころは、日本経済に大きな変革がおきた時期でもありました。



中村 昭和60年に弁護士登録しました。当時の企業法務というのは、総会屋と戦うのが主な役割でした。やがてバブルがふくらんでくると、その役割が買い占め対策と変わっていくのです。年に200～300件の買い占め事件がありましたが、ほとんどが非法組織による仕業でした。バブル崩壊後は株主代表訴訟がクローズアップされてきました。確かに、会社法の変化の大きな波とぶつかっていますね。

本来あり得ない主張で戦った ライブドア裁判

山内 日経ビジネスが実施している「企業が選ぶ弁護士ランキング」で4年連続総合1位を占めているのは驚くべきことですね。それだけ、素晴らしい仕事をしている証といえます。個人的には、ニッポン放送とライブドアとの攻防で、ニッポン放送側の弁護士として活躍されたのが印象的です。注2)

注2) ニッポン放送の支配権を巡る攻防。ニッポン放送はフジテレビに対して第三者割当による新株予約権の発行を取締役会で決議した。これにより、フジテレビはニッポン放送の総発行株式を上回る株式を取得できるようになり、ニッポン放送の子会社化が可能となる。これに対して、ライブドアは新株予約権の発行差し止めを求めて東京地方裁判所に申し立てを行い、その申し立てが認められた。

中村 敵対的買収の新しい姿です。実は、あの会社を巡って投資家や投資グループが押したり引いたりしていた長い歴史がありました。その意味では、ライブドアが最後に貧乏くじを引いたような側面があります。ニッポン放送・フジテレビというマスコミにとっては、信頼性の保持という問題があります。特定の色のついた企業の系列になってしまうと、スポンサーもコンテンツ提供者も逃げてしまうでしょう。

裁判になった新株予約権の発行は、防御作戦の1つです。フジテレビがこの権利を行使すれば、ニッポン放送の議決権を確保できます。当然、ライブドア側は発行差し止めの仮処分を申請します。結果的には裁判に負けましたが、株が戻ってきたのです。そのときは関係者の中で秘かに打ち上げをしました。

山内 整理すると、ニッポン放送がフジテレビの親会社だったのを、公開買い付けによって逆にフジテレビを親会社にして、グループの秩序を正そうとしたわけですね。

中村 そうです。フジテレビがTOBをかけて、グループを安定させようとしていたときに村上ファンドが保有していた株をライブドアが取得したのです。

裁判の帰趨はまったく予想が付きませんでした。この裁判は、原告被告間の争いというより、いかに裁判官に自分たちの主張が正当かを理解してもらうためのものでした。地道に説明を繰り返し、証拠を提出しました。相手側の出してくる証拠にはほとんど反論しなかったほどです。主張したのは、ライブドアがニッポン放送を支配するようになると両者とも赤字になり共倒れしてしまうということです。まったく新しい形の裁判の戦い方でしたね。結果的には、裁判後1週間で株が戻ってきました。

山内 過去の判例等をみると、本来ありえないような主張をされたわけですね。学問的には類似の研究はあったのですか。

中村 裁判所では判断しきれないような主張でしたね。従来なかった企業価値を守る主張ですから。学問的にはほとんど例がなかったでしょうね。現在でも議論されている最中で、定説のようなものはできていません。

企業は誰のもの？ 企業価値とは？

山内 面白いと思うのは、これまでになかった新しい概念で戦って、裁判では負けても実質的には自分たちが勝ったことです。この裁判で感じたのは、「会社は誰のもの？」というオーソドックスな疑問です。大卒者の多くは企業で働きます。会社に愛着を持って



会社は自分たちのものと考えている人が多いでしょう。バブル期以後は、会社は株主のものという考え方が強調されるようになってきました。そうになると、短期的利益を追求してリストラなどの問題が生じてきます。他方で、従業員のものという立場からは簡単にはリストラできないという意見がある。

中村 金融市場だけで考えると、市場原理から会社は株主のものとしています。しかし、事業会社はそうは思っていません。ところで、会社は誰のものかと真正面から問われると、「持ち主はいない」といわざるを得ません。つまり、会社（法人）は人と同じ存在です。株主は株主権を持っています。融資会社も当然権利を持っています。従業員だって権利を持っています。ステークホルダーそれぞれが権利を持っているのです。

翻って、会社がなぜ社会に受け入れられているかを考えてみると、提供する商品やサービスにより社会を豊かにする存在だからです。である以上、誰のものかを考えるより、どうしたらみんなのためになるかと考えた方が建設的です。企業の価値を高める人的資源・ノウハウを高めることが重要になります。イノベーション時代の企業では、人がポイントになります。次の時代の企業価値を高めるのは人材だからです。



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？





日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？



山内 その企業価値とは？

中村 DCF（ディスカウント・キャッシュ・フロー：キャッシュフローの割引現在価値）だけでは、物事は考えられません。企業価値の根源には、社風やモラル、企業文化……など目に見えない魂があると思っています。

山内 かつて対談をしたノリタケ相談役の佐伯さんは、「会社は株主のもの」という考え方に大反対をされていたのが印象に残っています。中村さんのお話と同様のことが、国家や大学にもいえるような気がします。文化をはじめ国民の持っている力が発揮できるかどうかが重要になってきます。

中村 文化や価値観が問われる時代ですね。金融など業種によっては市場原理優先というのはあり得るでしょう。しかし、日本人はそれだけでは生きていません。世の中の役に立つ、お客様に喜んでいただける仕事をしたいといった、日本人の持っている価値観や人生観を破壊してはいけません。

山内 会社法も変化が激しいですから学者も大変ですが、事業現場も大変でしょうね。中国や韓国でも会社法を改正していますし、世界的潮流になっているようです。

中村 会社法の考え方自体が大きく変わってしまいましたね。新しい会社法は、アメリカのシカゴ学派の影響が強く、法と経済学という考え方が反映されています。競争のなかで勝ち抜くために市場原理を導入しているのです。フランスやドイツも新自由主義的な傾向が強まっています。

山内 国際競争に勝つには市場主義的競争が必要ですが、一方でノウハウを蓄積していかないと企業にとって長期的な存続が難しくなってきます。

中村 アメリカでも、尊敬される企業としてランクインするような会社は、多くが終身雇用制をとっています。バランスの問題ですね。

日本の喫緊の課題は 人口減少時代への対応

山内 日本も大学もいま大きく変わっています。日本社会はこれからどんな方向に向かっていくべきだとお考えですか。

中村 財務省や法務省は、競争原理を入れることで経済を活性化させようとしています。その反面で、村上ファンドへの判決をみると反動的な方向に向かっているようです。5～10年先をみると人口減は確実に進んでいきます。外部から1000万人規模の労働力を入れないと経済成長は維持できないといわれています。こうなると日本の文化も変わってしまいます。それをせずにシュリンク

していくのに甘んじるか…。いま瀬戸際なのです。株主主権云々を早く乗り越えて、この問題に早く取り組む必要がありますね。

山内 人口が減少しても、少ないなりにやっていけばいいという考え方もあります。日本列島に6000万人くらいならやっていけるのではないのでしょうか。

中村 成長を考えなければやっていけるでしょう。ただ、日本に居を構える企業にとっては日本市場に頼れなくなりますから辛いものがあるでしょうね。

山内 日本語だけで勝負している出版業界には、人口減は打撃でしょうね。新聞やテレビもそうかもしれません。

弁護士が新しいアイデアを出し 判例をつくっていく時代

山内 将来、法曹を目指す人にアドバイスをいただけますか。

中村 新しい会社法の時代は、弁護士が智恵を出す時代です。今の時代は弁護士が新しいアイデアを出せば、何をやっても第一号になります。クライアントのためにどうしたらいいかという智恵の出どころです。逆にいえば何でもできる時代ですから、道を



踏み外してしまう可能性もあります。弁護士という職業は、これまでは正義の味方として尊敬されてきました。しかし、弁護士が悪事の負担をしてしまう可能性だってあるのです。それだけに、確とした信念や自分なりの理念が重要なのです。「私は~のために弁護士として生きている」という信念です。

山内 大学では、教養教育に力を入れていますが、これは弁護士にとって重要ですか。

中村 大事ですね。法律だけでなく、経済や会計など世の中のことを知っていないと仕事になりません。全体のバランス感覚が重要なのです。新会社法に関する本を書いたときには、経済のことも大いに参考にしました。

山内 一橋大学の一部の学部には、他学部の専門科目を一定数ま

で単位として認定する主専攻 - 副専攻という仕組みがあります。

中村 それはいいシステムですね。現在では弁護士と会計士との境はなくなってきました。資格と職業とが混沌としてきているのです。私たちの事務所の6人目の弁護士は経済学部出身です。彼はロースクールに入って法律を勉強したのです。

山内 それがロースクールのよさですね。他学部の学生でも法律に関心を持ったら、法科大学院を活用すればいいでしょう。

幅広く学び、経験して 発想のきっかけを数多く得る

中村 弁護士としての専門分野を考える際には、実務の中にどんな有望なジャンルがあるかという切り口で探すことも考えられます。ただし、あまり細かく考えすぎると、世の中の流れに取り残されてしまう可能性もありますが。

山内 あまりにも早い段階で専門分野に特化してはいけないということですね。大学では地頭を鍛えて、社会に出てからそこから生まれる応用力を生かして必要なことを学べばいい。

中村 大学で学んだことが、新しい発想のきっかけになることもあります。大学時代にFORTRANによるソフトづくりをやったことで、ITの発想がわかりましたし、統計学を学んだことで正規分布の意味がわかりました。後でどれだけ役立ったかしれません。こうしたきっかけを数多く持っているのは、大きな強みになります。

山内 学部時代には幅広く勉強したようですね。

中村 面白そうな授業には真面目に出席しましたね。

山内 面白いというのは、その人にとって大事なことからです。役立つかどうかわかりませんが、面白い科目に取り組むことは重要ですね。案外、後で役立つことが多いようです。大学のカリキュラムもきっちりしすぎているといけないのかもしれないですね。どこかにつまみ食いできるような余地を残しておかなければいけないようです。

それでは、最後に一橋大学や学生についてひと言お願いします。

中村 大学院をつくって社会人を受け入れるようになったことは、非常に素晴らしいと思います。大学時代は案外ボーッとしている時間が多くて、後になって「もったできたはずだ」と悔やむことが多いものです。社会人になってさまざまな経験をしてから一橋大学を振り返ると、凄い先生方がいたことがよくわかります。学生にアドバイスするとしたら、意識的にさまざまな経験をして、自分にとって面白いものを見つけるということですね。

山内 ありがとうございました。

連載企画

世界を解く

第十一回テーマ

「愛でる」

学ぶ、働く、遊ぶ...

人間は日々、さまざまな行為を営んでいます。どれも一見、ごく当たり前のこと。

国境も地域も、民族も歴史も、時間も空間も超えて、

普遍的に存在しているこれらの行為は、その普遍性ゆえに見過ごされてしまいがちです。

しかし、例えば「学ぶ」という行為の本質を深く掘り下げ、

さまざまな角度から「学ぶこと」の意味を問うたとき、

そこには驚くほど豊かな世界が現れてきます。

学ぶことの社会的意味とは、その歴史的経緯が伝える価値観の変遷とは、

学びの経済効果と社会システムとの関係とは、等々。

ごく当たり前の行為は、その相貌を一変し、生きるという営為の本質に迫る、

あるいは社会と人間のあり方の原点を理解する、貴重な手がかりとなるのです。

本特集企画は、こうしたキーワードにスポットをあて、そこから浮かびでる多様で豊かな世界を、

それが示唆する多くの問題点をありのままに考えていきます。

第11回のテーマは、「愛でる」。

異なる専門領域、視点をもつ研究者たちに、

それぞれの立場から「愛でる」という言葉が連想させる今日的諸問題を語っていただきました。

e s s a y 「めでる めでたい おめでたい」

言語社会研究科教授 糟谷啓介

何にせよ「愛でる」対象をもっているのは、たいへん「めでたい」ことである。しかし、物事には限度というものがある、度が過ぎると奇人変人あつかいされることもある。一言で言えば、「おめでたい」人間にみられかねない。

平安時代の短編小説集『堤中納言物語』に収められた「虫愛づる姫君」は、そのあたりの事情をみごとに描いてくれる。虫といってもこの姫君が好きなのは蝶のたくいではない。なんと毛虫がこのほかに気に入るのである。家来たちに採らせた毛虫を籠に集めて、年がら年中その姿を眺めて飽きない様子。周りの者は気味悪がって、姫ともあろうものが毛虫を眺めて喜んでいるのはいかにがなものか、世間のお姫様のようにせめて蝶を集めてはいいかがか、などと進言しようものなら、「毛虫が育ててあのような蝶になるのです。あなたがたは見かけにだまされてはいけません。わたしは物事の本質を追究したいのです」などと反論されてしまう。そして最近では毛虫だけではものならず、かたつむりやカマキリにまで触手を伸ばしている。あげくのはてに、言い寄ってきた男性からは「あなたの眉毛は毛虫のように美しい」などと言われる始末。こうなるともう何が何だかわからない。

なるほど、この姫君の「愛で方」はいかにも堂に入っている。し

かしよく考えてみれば、何のことはない、この姫君はただの「虫フェチ」にすぎないような気もしないではない。けれども、「フェチ」だといって軽んじてはいけぬ。マルクスが喝破したように、資本主義社会だって商品の物神崇拜、つまり「商品フェチ」によって支えられているのである。それまでは平凡なものにしか見えなかった物体が、ある日突然不思議な形而上学的神秘にあふれた何物かとして眼に映じてくる。かくして他の人が見れば何の意味もないところに差異を見出し、欲しいものを手に入れなければ日も夜も明けぬようになる。その点では姫君の虫も資本主義社会の商品も何ら変わりはない。いやそれどころか、「を愛でる心」などというのは、つきつめれば「フェチ」に行き着くのではあるまいか。玩物喪志、呪物信仰、蓼食う虫も好き好き、あばたもえくぼ。すべての愛はフェチに通ず。いやたしかに「めでたい」こと、いやはや「おめでたい」ことである。



数学の美しさと出逢うために

数学は美しいといわれるが...

美しいものを見たり聞いたりすることは、誰にとっても楽しいことである。身近な国立キャンパスにおいても、草花、樹木の佇まいなど、四季折々の美しい自然に触れると、心が癒される。国立の方向から見ると、冬至の前後に夕日が富士山の後ろに沈むが、夕焼けから青紫色に暮れていく空を背景に浮きあがる富士山のシルエットは、すばらしく美しい。また、冬の朝、澄んだ大気を通して、朝日に雪を輝かせる富士山を眺めるのも、楽しみのひとつである。自然ばかりでなく、音楽、絵画、工芸品なども、多くの人々を感動させてくれる。数年前に、台湾の故宮博物院を訪れる機会があった。山の懷に抱かれた、両翼を広げたような優美な建物全景に、まず感動したが、博物院の展示物を見て、ここがなぜ世界有数の博物館であるのか、改めて理解できた。特に、漢字に惹きつけられた。青銅器に刻まれた文字、あるいは名筆家の掛け軸の見事な筆使い、役人の書いた行政文書に見られる几帳面な文字などを眺めていると、一種名状しがたい感情に襲われた。

数学の国際研究集会では、開催期間が月曜日から金曜日までの1週間で、講演が午前と午後、場合によっては夕食後にも組まれている、というのが典型的なスケジュールである。さすがにこれでは疲れるので、途中でエクスカーションと称して、息抜き時間が設けられることが多い。くだんの故宮博物院も、台湾大学で開催された国際研究集会のエクスカーションとして訪れたものであった。希望者が故宮博物院の観覧に参加したが、現地では流暢な英語を話す美人の解説者に引率されて、展示物を鑑賞した。とある陶磁器の前で、「この壺の側面には、魚を取る網が描かれて

いる」との説明があった。数学者とは困ったもので、このとき「自分には網のように見えない」と言った参加者がいた。これに対して解説者が「Use your imagination」と、冷たく言い放ったときには、いささか驚いたものである。展示物に書かれた、あるいは刻まれた文字に惹かれたのは、漢字圏に暮らしていることが大きいように思う。今現在日常的に使用している文字が、時空を超えて宝物として目の前に展示されていることに、不思議な感動を覚えた。欧米からの参加者には、これらの文字はどのように受け取られたのであろうか。数学も、しばしば美しいと表現されるが、数学者にとって美しいとされる数学的な事象を、一般的な言葉で説明するのは難しい。

モニター単純群

均整の取れた図形には、対称性が隠されている。たとえば、正三角形を1/3回転すると、ぴたりと重なる。また、ひとつの頂点と中心を結ぶ直線を軸として、表裏を入れ替えても図形は変わらない。これらの操作は、正三角形の3つの頂点の並べ替えとして、表すことができる。3つの頂点の並べ替えは、全部で6通りある。これら6通りの並べ替えの集合を、 S_3 と表すことにする。 S_3 は2つの並べ替えを続けて行うことを演算として、群になる。群とは、最も基本的な代数構造で、演算について、(1)結合法則、(2)単位元の存在、(3)逆元の存在、という3つの条件を満たすものを言う。正三角形の3つの頂点の並べ替えについては、並べ替えを行わないことが単位元で、逆の並べ替えが逆元になる。 S_3 を、3次対称群と呼ぶ。このほかに、より一般的なn次対称群、実数あるいは複素数を成分とするn次正則行列全体のなす群など、様々な群がある。群は、あるものの対称性を表している。n次対称群は、n個の元の並べ替え全体のなす群である。一方、n次正則行列は、n次元ベクトル空間の正則な線形変換と対応する。群における演算が、結合法則、単位元の存在、逆元の存在、という3つの条件を満たすことは、演算に関して群は調和のとれた世界を構成している、ということができる。

群の研究は、有限個の元からなる有限群と無限個の元からなる無限群とで、大きく異なる。有限群の構造を考えると、最



も基本的なものとして単純群がある。有限単純群の分類は、数十年におよぶ長い研究を経て、1981年に完成した。その結果、有限単純群は、5次以上の次数の交代群、Lie型の群、および26個の散在型の群に限ることがわかる。交代群およびLie型の群は、パラメーターをもつ無限系列の群である。一方、26個の散在型の群は、いくつかのグループに分けることができるが、個々に独立して存在する。散在型の群のうち、元の個数が最大のもは、モンスター単純群と呼ばれている。その元の個数は、およそ 8×10^{53} 、正確には

$$808,017,424,794,512,875,886,459,904,961,710,757,005,754,368,000,000,000$$

$$= 2^{46} \cdot 3^{20} \cdot 5^9 \cdot 7^6 \cdot 11^2 \cdot 13^3 \cdot 17 \cdot 19 \cdot 23 \cdot 29 \cdot 31 \cdot 41 \cdot 47 \cdot 59 \cdot 71$$

である。

モンスター単純群は、1973年に発見された。位数2の元、すなわち自分自身との積が単位元となるような元は、有限群にとって特別に大切な意味がある。2つの位数2の元の積が常に位数3以下の元であるとき、その群を3-互換群と呼ぶ。このような群は、Fischerにより研究され、Fischer群と呼ばれる3つの散在型の単純群につながった。Fischerはさらに、2つの位数2の元の積が常に位数4以下の元になるような群を研究し、未知の単純群が存在する可能性に気づいた。その単純群は、今日ペビーモンスター単純群と呼ばれている。その後、FischerとGriessは独立に、ペビーモンスター単純群を含むさらに大きい単純群が存在する可能性を示した。その大きい単純群が、モンスター単純群である。モンスター単純群はGriessの1982年の論文The Friendly Giant, *Inventiones Mathematicae*, Vol. 69, pp. 1-102により、存在することが確定した。実際、Griessは196,883次元の非結合的可換代数の全自己同型群として、モンスター単純群を具体的に構成することに成功した。モンスター単純群の発見にまつわる歴史は、鈴木通夫、有限単純群の分類、数学、第34巻、193-210頁、1982年に詳しい。ちなみに、FischerとGriessのイニシャルFとGを冠した“Friendly Giant”は、好ましい名称と思われるが、歴史的にはConwayが名付けた“Monster”が定着した。

Monsterという単語は、奇怪なものを表し、あまり良い意味では用いられないことが多いようである。モンスター単純群の元の個数を因数分解すると、1乗の因数が17、19、23、29、31、

41、47、59、71と、9個ある。群のモジュラー表現では、1乗の因数があると都合の良い議論ができる。モジュラー表現の理論の創始者であるBrauerは、「これはモンスターではない。とても良い性質の群である」と言ったそうである（原田耕一郎、モンスター、岩波書店、1999年を参照）。

突き詰めた者こそが出逢える「美」の世界

登場から間もない1970年代半ばから、モンスター単純群と整数論における保型関数との関係が注目されていた。モンスター単純群の元の個数の素因数は15個あるが、この15個が保型関数においてある性質を満たす素数と一致することが、Oggにより指摘された。その後、Conway and Norton, *Monstrous Moonshine*, *Bulletin of the London Mathematical Society*, Vol.11, pp. 308-339, 1979において、モンスター単純群の既約指標と保型関数との関係に関する、ある種の予想が提出された。この予想は、ムーンシャイン予想と呼ばれるが、それは、モンスター単純群が作用する無限次元の加群の存在を示唆するものであった。そのような加群は、Frenkel, Lepowsky, Meurmanにより、1988年に頂点作用素代数を用いて構成された。さらに、Borcherds, *Monstrous moonshine and monstrous Lie superalgebras*, *Inventiones Mathematicae*, Vol.109, pp. 405-444, 1992により、ムーンシャイン予想は証明された。

千葉大学の自然科学系総合研究棟1階にある「サイエンスプロムナード」に、モンスター単純群の元の個数を刻んだモニュメントがあるが、これを提案した千葉大学の先生によると「人類が到達した意味のある数字のうち最も大きいもの」とのことである。モンスター単純群は、およそ 8×10^{53} 個の元からなる群である。このような巨大な集合が、調和のとれた世界を構成している様は、壮観である。「モンスター単純群は、ひとつの宇宙のようなものだ」と言った数学者がいるが、まさに至言であろう。Oggにしても、自分自身の研究で2、3、5、7、11、13、17、19、23、29、31、41、47、59、71という15個の素数に出会っていたからこそ、モンスター単純群の元の個数の素因数を見て、背後に何かあると直感したのである。その背景がなければ、素因数分解を見ても何も感じ取れなかったであろう。数学は美しいといわれるが、美しさを感じるには、それなりのバックグラウンドが必要なようである。



眠る女を愛でる

恋愛の誕生

「恋愛は十二世紀の発明である。」歴史家セニョボス(1854-1942)のこの言葉に象徴されるように、十二世紀に南仏吟遊詩人^{トールバドゥール}がうたいあげた「宮廷風恋愛」は、婚姻としては実を結ばない愛のありようを描いて人間精神の劇的な深化をもたらした。狂気でも単なる戯れでもない、情熱恋愛のかたちが誕生したのである。

肉欲を厳しく戒めるカトリックは、種の繁栄と社会秩序の維持に寄与するかぎりにおいて、貞節を守った性愛行為を「結婚の秘蹟」として承認したのであるが、聖俗両権力が手を結んだこの功利的な好策のあやうさに中世詩人たちが敏感であったということは、実に興味深いことである。結婚によって封印された愛の意味の分裂と相克 純化された情熱か、性愛行為としてのその実践か、社会が認めるかたちへの服従か... が主題化されたのである。さらに、封建社会と騎士道精神の二重の掟の不協和音、すなわち騎士の、主君への封建的忠誠と、至高の貴婦人(往々にして主君の後という結ばれえぬ高貴な人妻)への絶対的服従という二つの義務の錯綜した葛藤のうえに築かれる、結婚とは無関係の愛、現世で貫けば死に至るほかない「至純の愛 Fin'amors」を語ることによって、中世西欧文学は、公の制度としての結婚を真っ向から否定する恋愛の表現を創り出したのである。

愛か結婚か

十二世紀後半にフランス宮廷附司祭が起草した恋愛法典『愛の技法』に則って、貴婦人たちの館では恋愛沙汰を裁く「愛の法廷」がしばしば開かれた。1174年5月3日の法廷で「真の恋愛は結

婚したもの間にも存在しうるや？」という問題に対し、シャンパーニュ伯爵夫人が「否」の判決を出したことはよく知られている。十二世紀に流布した『トリスタンとイゾー』をこのことわりの結晶と見、また今日に至る西欧文化の基底をなす愛のかたちの典型をそこに見たドニ・ド・ルージュモンは、その古典的名著『愛と西欧』(L'Amour et l'Occident, 1939, 1956, 1972; 邦訳『愛について』)において、「現実になればもはや恋愛ではなくなる」がゆえに、愛が愛として永続するよう敢えて障害を選び、「障害がなければ作り出しもする」志向、「満たされる恋愛の放棄」への意志こそを、愛の「西欧的」型と呼んだのであった。曰く「幸福な恋愛は、西欧文学の中では歴史を持たない。」

愛の非成就への執拗な欲求を持たない文化として、ルージュモンは「東洋」を考え、「アメリカ」に驚く。「ヨーロッパの伝統的因習から解放されている」あの新世界では「恋愛と結婚が同義語であり、恋愛はあらゆる障害を克服するはずのものであると素朴に信じられている」「ただ一つの障害すなわち持続性を除いて。」恋愛万能主義に帰依する彼らは、恋愛=結婚=幸福の三位一体にひびが入るとさっそく「離婚」によってそれをリセットし、ハッピー・エンドの秘蹟を何度でも繰返し更新しようとする。その飽くなき「フロンティア精神」に、旧き欧州の碩学は驚嘆したのであった。

愛することを愛する

ならば、「永久に満たされることのない不幸な恋愛の賛歌」への「西欧」のこだわりは何ゆえか。このあまりにも茫漠とした問題に、ルージュモンは膨大な文献探査をもって答える それは「苦悩を通して、死の瀬戸際にいるぎりぎりの自己を認識しようとするわれわれの嗜好」によるのであろうと。「苦悩と認識の緊密な共犯関係」、「特に愛の苦悩を認識の天与の手段にする」欲求が「西欧の認識形態」の不易の様相なのである。それだけではない。「愛の不幸の原因は、双方の自己愛に仮面をかぶせた見せかけばかりの相互性にある」とルージュモンは喝破する。それは「愛することを愛する」行為、愛の相手となる他者を触媒に、愛を感じる自己を認識すること、愛することの意識化にほかならない。中世に誕生した思考様式、恋愛を精神の飛

愛でる



翔の契機とみなす考え方の裏には、この相思関係の偽装あるいは錯覚が隠れているのであり、まさにそのなかでこそ、「女」を精神の闘ぎ合いの対等なる担い手に相応しい存在、「物体としてではなく人格として眺めるまったく新しい態度が生まれたのだ。」ルージュモンによれば、以来、西欧文学はこの凄まじき愛の幻影の生成過程を表象し続けてきたことになる。

ある出会い

このプロブレマティックな見解に敢えて従うならば、筆者の研究対象である二十世紀フランス作家マルセル・ブルーストと日本の読者との初めての出会いもまた、西欧が育ててきたそうした愛のかたちを強く印象づけるものであったと言えるかもしれない。

日本語で読まれた最初のブルーストの文章は、大正12年3月『明星』第三巻第三号に重徳泗水の訳で掲載された「彼女の眠」《La regarder dormir(眠る彼女を見つめる)》である。これは『失われた時を求めて』の第五篇『囚われの女』の一節を、単行本刊行に先だつ雑誌発表用に作家が手を入れて(ヒロインの名を変えるなど)前年の1922年11月1日号の「新フランス評論」誌に掲載したものなのだが、朝日新聞記者の経験も持つ当時のフランス通泗水は、その二週間ほど後に没した「佛國文壇の流行兒たる異才マルセル・ブルースト」の「半ば自叙傳で、微細綿密な観察、感覺、視覚の鋭利透徹したものの寶庫であり、その文章は時時粗雑なところもあるが、畫觀的獨創性、事物を回想させる力、神經質に富んだものであつた」長編小説の「一端を窺う」べく、件のテキストの抄訳を試みたのだった。その冒頭をここに引いてみよう。

彼女の眠

マルセル・ブルースト(重徳泗水訳)

彼女の睡眠が打ち續く間、私は彼女を夢想し、彼女を視守り、又睡眠がもつと深くなる時には彼女に觸れ、彼女を抱くことが出来た。そのとき私が感じたものは、丁度自然の美と稱する自若たる創造物の前に立つてあるときのやうに純な、無形的な、神秘的な感じであつた。さうだ、ジゼルが深き眠りに落ちた時はもう、彼女は最早一本の樹ではなくなつて、その睡眠のごく側に、決して飽く所のない又いつまでも味ひたい新鮮な肉欲を夢想してゐる私にとつては、一つの全景であつた。その睡眠はバルベエク灣(譯註、シリアに在り)(正しくはノルマンディのリゾート地として小説に登場する虚構の土地の名:中野註)の

明月の夜な夜な、湖の様な静けさの中で樹の枝の微かに戦ぐ下で、沙上に伏して波の寄せ返すのをいつまでも聞くときのやうに穏和で、又官能的に爽かな或ものを私の周囲に濛はせてゐた。部屋に入り掛かつた私は音を立てぬやうにしばらく入口に佇立してゐた。その時私の耳に這入つたものは、彼女の唇の上に間歇的に又規則的に、波のやうにしかしもつと軽く、もつと和やかに現はれては消ゆるその呼吸の外には、何もなかつた。そして私の耳がこの神祕的な音を受入れた時、その音の中に、私の眼の下に横たはつてゐる美しい捕はれた女の全身、全生命が絞り出されてゐるやうに私には見えた。

西欧芸術に繰返し現れてきた<眠る女>の表象の魅力を解析するかのやうな文章である。眠りに落ちた女を見つめる行為は、相手の視線に縛られることなく、見る者の欲望と想像力の働きを活性化し全開にする。女がかつて未知の神祕を湛えて生きていた外の風景は女の体の内に嵌め込まれ、共に暮らし慣れた女の枯渇しがちな魅力に潤いを取り戻させる装置となっているのだ。

幻影の美

視野に収まった「海洋画」=女体に自らの体を重ねてその「眠りの上に船出した」男はしかし、一瞬間だけのような海の微風が再び渦を巻き始めるのに気づく。愛の成就の「イリュウジオン」のなかで、目の前に横たわる女の内に封じ込められた千変万化の生の潜在力を思わずにはいられないからだ。「彼女はその頭の置き處を變へる毎に新しい形的女となり、その中には私の予想することの出来なかつたものさへ少なくなかつた。」嫉妬をそその未知の萌芽がまどろむ姿態を想うこと。それは「いかなる所有よりも甘美なもの」すなわち恋する意識そのものを消さぬよう、「所有の障害またはその成就の不可能性」を常に潜在的に起動させておく、愛する者の奸策でもある。精神のあらゆる活動を動員して美しく築かれる所有の錯覚。「この時私は知覚のない或る物として、抵抗力のない彼女を完全に占有したと思つた。」

見返されることなく見つめる。対等なコミュニケーションの断絶によって成り立っている<見る男>の愛の至福の実感のなかで、<愛でられる女>は人格と物とのあいだをたゆたっている。ブルーストと日本の読者の出会いは、あの絶妙なバランスのうえに愛の技法を成熟させてきた西欧文化との接点の一つであつたのだろう。

ストリート・オルガンを愛でる

河口湖のストリート・オルガン

冬の一日、富士五湖ドライブに出かけたついでに、《河口湖オルゴールの森》を訪ねてみた。富士山の雄姿をのぞむ湖畔の庭園に立派な博物館があって、周囲には池や噴水、オシャレなレストランなどもある。休日とあって多くの訪問者であふれていた。この種のオルゴール博物館は、ハケ岳高原の清里にもあるし、たしか伊豆高原にもあったような気がする。メルヘンチック（正しいドイツ語ではメルヘンハフト！）で「カワイイ」オルゴールには、きっと若い女性たちを惹き付けるものがあるのだろう。

《河口湖オルゴールの森》の自動楽器のコレクションは、予想以上に充実したものだった。経営は高級焼き鳥レストランで成功した企業だそうで、どうやって集めたのかは知らないが、すこぶる高価と思われる逸品が多数並んでいる。私の場合、お目当てはオルゴール系よりは、ストリート・オルガンとか手回しオルガンと呼ばれるオルガン系の自動楽器だ。ふいごで空気を送り込んで、厚紙に穴を開けたロール紙でバルブの開閉を制御し、小さなパイプオルガンを鳴らす、というのが、この種の自動楽器の基本原理だ。大規模なものになると、横幅10メートル、高さ5メートルもあって、オルガンをはじめ金管・木管の管楽器はもとより、打楽器やヴァイオリンのような弦楽器まで鳴らしてしまう。この博物館にはそうした巨大な自動楽器もあって、実際に鳴らしてくれる。送風はもちろんモーターを使うのだが、風力を使うという原理は小さなストリート・オルガンと変わらない。鳴り響くのは、19世紀末から20世紀初頭の時代の行進曲やオペレッタのメロディーだ。音量もたいへんなもので、その迫力には圧倒された。いろいろな楽器が一斉に音をた

て、ありったけの副旋律や伴奏の和音を響かせるから、やたらににぎやかで華々しい。かつて遊園地や町の広場などで、人々を寄せ集める最も強力なアイテムだったというのがよくわかる。

「音楽の魔法の箱」に胸が熱くなる

レコード録音が発明される以前の時代、音楽を聴くには、生演奏か、そうでなければこうした機械仕掛けの自動楽器によるしか方法はなかった。20世紀初頭に複雑化と洗練の頂点に達したこうした自動楽器には、機械仕掛けで楽器を鳴らし、音楽を鳴り響かせようと工夫に工夫を重ねた専門の技師や職人たちの執念のようなものが感じられて、その「演奏」を聴くたびに、いつも私は胸の熱くなる思いがする。最近LPやSPレコードの人气が復活しているようだが、それら以上にレトロでローテクなのが（いや、きわめて高度なスーパー・ローテクとでもいうべきなのが）このテの自動楽器だ。それは、おもちゃの延長上にあるようなものかもしれないが、日頃音楽を聴く機会に恵まれない大勢の庶民に、いくばくかの音楽を聴く喜びを与えてきた「音楽の魔法の箱」なのだ。同じ複製技術による音楽でも、レコードやCDとちがって、自動楽器の技術には人の血の通った温かみがある。

福祉の道具にもなったストリート・オルガン

自動オルガンは、18世紀後半のモーツァルトがすでにそのために小さな曲をいくつか書いているくらいだから、ゆうに二百年以上の歴史を持つ。19世紀のドイツでは、自動オルガンはポータブルな手回しオルガンとして、街頭音楽の重要なアイテムのひとつとなった。手回しオルガン弾きは、広場に立ってオルガンの取っ手をグルグル回し、いくつかのメロディーを鳴り響かせて人々を集め、わずかばかりの投げ銭を得ていた。老人や、戦傷者、身体障害者などが多く、たいていの場合、困窮の生活が背景にあった。シューベルトの歌曲集『冬の旅』の最後の曲「手回しオルガン弾きDer Leiermann」は、そうした人の姿を歌ったものだ。（ちなみに、この曲のタイトルを「辻音楽師」と訳すのはやはりマズイ。「辻音楽師」というと、ヴァイオリンや



ギターで生の演奏を聴かせている楽師を思い浮かべてしまうからだ。その意味では「弾き」もよくないのだが……。）

村のはずれに
ひとりの手回しオルガン弾きがいる
かじかんだ手で
懸命に取っ手を回している
裸足のまま氷の上で
よるめきながらだ
小さな投げ銭の受け皿は
いつまでたっても空のままだ
だれひとり聴いてはあらず
だれひとり見る者もない
犬どもだけがその老人のまわりで
うなり声をあげている
老人はまわりのことを
いっさい気に留めず
ひたすらオルガンを回し
曲を鳴り響かせている
風変わりな老人よ
私はきみと一緒にいこうか？
私の歌に合わせて
きみはオルガンを回してくれるか？
(ウィルヘルム・ミュラー詩)

これほど救いがなくはないが、この歌の情景と相通ずるような光景は、私もドイツで何度か目にしたことがある。中にはこざっぱりした服装の老人もいたが、多くはひと目でアル中とわかる人たちだった。現在でもドイツでは、ストリート・オルガンは社会福祉の方策のひとつとして、それを必要とする人々に貸し出されることが多いという。

裏街道の花、ベンケルザング

19世紀ドイツの民衆的音楽文化で、ストリート・オルガンと切っても切れない関係にあるのがベンケルザングだ。モリタートとも呼ばれ、日本では大道歌と訳されるベンケルザングは、ベンケルゼンガー（大道歌手）が町の広場や街頭で歌った民衆的バラードのことで、ストリート・オルガンによる伴奏と絵解

きの看板を伴って歌われた。内容は凶悪な犯罪や大災害、大事故、悲惨な運命などをテーマにしたものが多い。庶民はまだ新聞を読まず、ましてラジオやテレビもなかった時代に、ベンケルザングは新聞の三面記事、週刊誌、テレビのワイドショーのような役割を果たしていた。いわば小さな総合的メディアだったわけで、さまざまなニュースや悲しい身の上話などが、歌にされて伝えられた。ストリート・オルガンが奏でたベンケルザングのメロディーは、どれも単純とはいえ、ドイツの民衆的旋律の精髓ともいえるようなもので、すこぶる感傷的で浸透力のあるものが多い。聴けばドイツ人ならずとも胸がキュンとなるような、非常に親しみやすく懐かしい旋律ばかりなのだ。いわゆるドイツ民謡と呼ばれるものは、19世紀のロマン主義によって国民的文化として重視され、学校教育にも取り入れられるなど、いわば表街道を進むことができた歌の文化だが、より庶民的で卑俗な性格をもつベンケルザングは、国民的文化として誇るには値しない、いわば裏街道の路傍の花といった存在だった。シューベルトやシューマン、ブラームスやヴォルフの芸術歌曲の背景には、そして「うるわしい」ドイツ民謡の裏側には、こういう歌の世界もあったのだ。

数年前の一時期、御茶ノ水駅や吉祥寺駅の駅前でストリート・オルガンを回すヨーロッパ人らしい男が出没したことがあった。かなりみすばらしい身なりの中年男で、ドイツ製のオルガンを使い、ドイツやオーストリアの行進曲やナツメロを響かせていたが、通行する人々はあまり気にとめていない様子だった。そういう私も、珍しい光景に驚いて遠くから眺めるばかりで、小銭を差し出すこともしなかった。あれはどういう人で、どういういきさつで、東京の雑踏でオルガンを鳴らしていたのだろう。何かまぼろしのような記憶である。

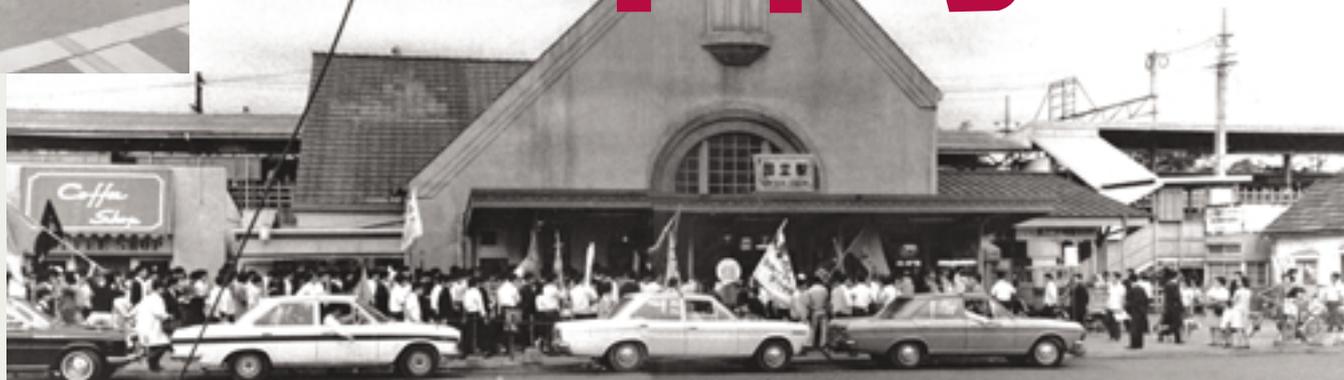
《河口湖オルゴールの森》では、希望すればいくつかのストリート・オルガンを自分で操作してみることもできる。私もやってみた。意外だったのは、取っ手を回すのにかなり力があることだ。回す速度も、スムーズに曲を鳴らそうと思うとけっこうむずかしい。それでも、初心者なりに、自分で回して音を鳴らすのは、非常に心躍る体験だった。家に帰り、インターネットで検索してみると、ドイツにはストリート・オルガンの愛好家団体、博物館、演奏グループ、製作者、関連イベントなど、いろいろなサイトがあって、時間の経つのも忘れてサイト・ウォッチングにふけてしまった。骨董品は高価だが、新品は百万円くらいからある。いつか一台手に入れてみたいものだ。



進化する大学



ベテラン職員が見た この40年間



学園封鎖、小平分校廃止、 大学院大学化、国立大学法人化…… 手応えを感じ続けた激動の40年でした

座 談 会

いまから40年ほど前に新人として一橋大学の門をくぐった4名の職員。
彼らの目には一橋大学の変化がどう映ってきたのだろうか。
大学改革の裏方として活躍したベテラン職員4人に、率直に話し合ってもらった。

《座談会出席者（発言順）》



学長室長
大神田 正
(昭和42年採用)



法学研究科事務長
小池三義
(昭和41年採用)



国際企業戦略研究科事務長
原 廣和
(昭和42年採用)



学務部学生支援課課長代理
市川裕一
(昭和42年採用)

一橋大学に奉職したきっかけ

大神田 当時の職員採用は、公務員試験が受かると名簿に載って、「文部省主管の一橋大学で募集しています」という通知があるのです。こちらに選択肢があるわけではなく、「それなら受けてみようかな」という感じでしたね。

小池 私の場合は、防衛庁書記官などいくつかの試験を受けて選択しました。大学なら本が読めるのではないかというのが、一橋大学を選んだ理由です（笑）

原 東京経済大学の夜間部に通わせてもらえるというのが、私の場合大きな動機になりました。

市川 私の高校時代の恩師がたまたまこの近くの出身で、一橋大学がいいよとすすめてくれました。東京経済大学に通えるから、卒業までの間、東京で勉強して来いとも言われましたが…。

大神田 私は長男ですから実家の山梨から通えるのは、こしかなかったのです。

40年前の一橋大学の状況

大神田 一橋大学の図書館の時計台が中央線の電車からよく見えたのが印象的でした。当時はまだ法人本部棟がなく、別館の前に倉庫と車庫があり、本館の1階がすべて事務室になっていました。すでに第一講義棟はありましたが、東本館は理科系教員の研究室や授業に使われていました。

市川 当時は、大学通りが片道1車線だけ舗装されていました。あまり建物がなく、強い風が吹くと砂埃で南の空が真っ赤に見えました。

小池 牧歌的で感じがよかったですね。最初は学生部の厚生係で、寮やアルバイトを担当しました。中和寮の設置にもかかりました。年齢も近かったこともあって、学生と親しく付き合いました。一橋祭担当時に、運営委員の学生たちと一緒に背広のまま池に落とされたことがありました。それだけ学生と息が合っていたのです。

大神田 笑い話ですが、小池さんが入ったときは暖房がなくス

トープ用の石炭を夏のうちに買いだめしたという話があります。

小池 出勤して何をやるかという、まず最初にダルマストーブに火を入れることでした。



市川 教室に冷房が入ったのは、小平移転後ですかね。スチームは？

大神田 昭和41年にスチームが教室に入って、暑いくらいでした。暑いのでバルブを閉めると音がするので、入学試験のときなどは最初から止めていました。

原 夏は大変でしたが、昔の建物は天井が高いこともあって、比較的涼しかったような気がします。

大神田 大学に蚊取り線香を用意してもらって、それを焚きながら仕事をしたものです。

小平分校廃止の影響

小池 小平分校廃止（平成8年5月11日）のときには、企画室のスタッフとして小平にいました。午前中は小平事務所で仕事し、午後には国立で国際企業戦略研究科と言語社会研究科の設置準備の仕事をするという生活を1年間行いました。小平分校廃止は、大学院重点化の流れと新学部構想がリンクして進められたものです。



大神田 小平分校廃止のときは施設課企画担当でした。東1号館の建設では三十数社で一般競争入札を行いました。これが国立大学の建築契約で一般競争契約を採用した最初の契約であったと記憶しています。建物の配置では、基本的には小平にあったものは東キャンパスに置くというのが基本構想でした。東1号館と2号館ですね。



原 移転に伴って、耐震構造はじめ設備が良くなったことはいえますね。

小池 現在では5年一貫教育など、学生を鍛えていくプロセスを長く見るようになってきました。それができる時代になってきたのです。小平に教

養課程があったときには、学部の枠がなかったり、クラスの結束が強かったりという面もありましたが...

原 昔ほどクラス単位でものごとを行おうということはありませんでしたね。

大神田 『如水会報』を見るとゼミ通信や卒業年ごとのクラス会などが載っています。OBの方たちにはクラス意識が色濃く残っていますね。

大学法人化以降の変化

大神田 法人化で事務的に変わったのは、国の会計から企業会

計への変化です。人事面では、人事院規則から就業規則に変わりました。何よりも大きく変わったのは、「学生はおお客様だ」という意識ではないでしょうか。例えば、学生向けのワンストップサービスもその表れです。

原 そう思いますね。

小池 法人化でもっと自由になるかと思ったら、案外縛りがきつく、自己責任ということで責任だけが重くなってきた感じです。

原 事務サイドで確実にいえるのは、業務が複雑化して事務量も増えたことです。

小池 学生数も教員数も外国人留学生も増加しています。しかも、新しい大学院ができたり...。当時の学生数は学年で600~700名程度でしたが、現在では総数で約7000名弱になっています。

大神田 職員数も40年前は約270人おりましたが、現在では約170人です。一人当たりの負荷はかなり高まっていますね。

市川 法人化後は、地域社会なども視野に入れるようになり、仕事の幅は広がっています。「お客様」という言葉は使ってはいませんが、昔から学生が快適に学ぶことができる環境を提供しようという意識はありました。法人化以後、その意識が顕在化してきたといえます。

一橋大学で働くことのよさ

原 緑も多く建物もきれいで、全国的に見ても稀に見るほど環境のいい大学で仕事ができるのはうれしいことです。

大神田 平成11~12年の2年間、他大学に出向しました。就職担当として苦労をし、一橋大学がいかに恵まれているかがよ



くわかりました。いい経験でしたが、カレンダーには「早く戻りたい!」と書いたものです。

市川 大学も早めに卒業してしまって(笑)5、6年経ったとき田舎に帰ろうと思

いました。それを思い止まったのは、やはり仲間ですかね？今となってはどちらがよかったのかわかりませんが、帰っていたら人生は随分変わっていたでしょうね。

小池 団塊の世代というのですか、市川さんたち昭和42年組はかなりの数の新規採用をしています。しかも、それぞれが個性的でバラエティに富んでいるのが特徴でしたね。

この40年で印象的だったこと

大神田 給与計算が印象的です。当時一橋大学が電子計算機による給与計算の試験校でしたから、文部省に資料を持ち込んでチェックしたものです。それも3泊4日で処理しなければな

りませんから、夜はイスに寝るという状況でした。

原 私は小平分校廃止に伴うクラブの部室の移転作業が印象に残っています。学生の意見を聞きながら国立に新たな部室をつくるわけですが、その意見の集約が大変でした。

市川 昭和42年に入ったときは学部事務室。当時は本当に仕事が少なくてのんびりしていました。仕事が少ないことを他の人に漏らしたのを上司に知られて、「そんなことを言いふらして歩くんじゃない」と叱られました。それを考えると、いまの仕事量は何十倍にもなるでしょうね。

また、事務室が封鎖されて違う場所で仕事をしたときのことも鮮明に覚えていますよ。



小池 学園封鎖や小平分校廃止のときは学生部と企画室にいました。自分と同じ年頃の学生と接する仕事ですから、楽しかったですね。昭和59年から63年まで入試主幹（学生受入課前身）で帰国子女

入試の導入、共通一次試験導入に伴う追加合格と公私立大出張を担当。事務局に移ってからは半ドン（土曜日）の仕事の割り振りをやりました。土曜日は、半日仕事して午後は仲間と過ごすなど、充実したプライベートタイムを過ごしていました。

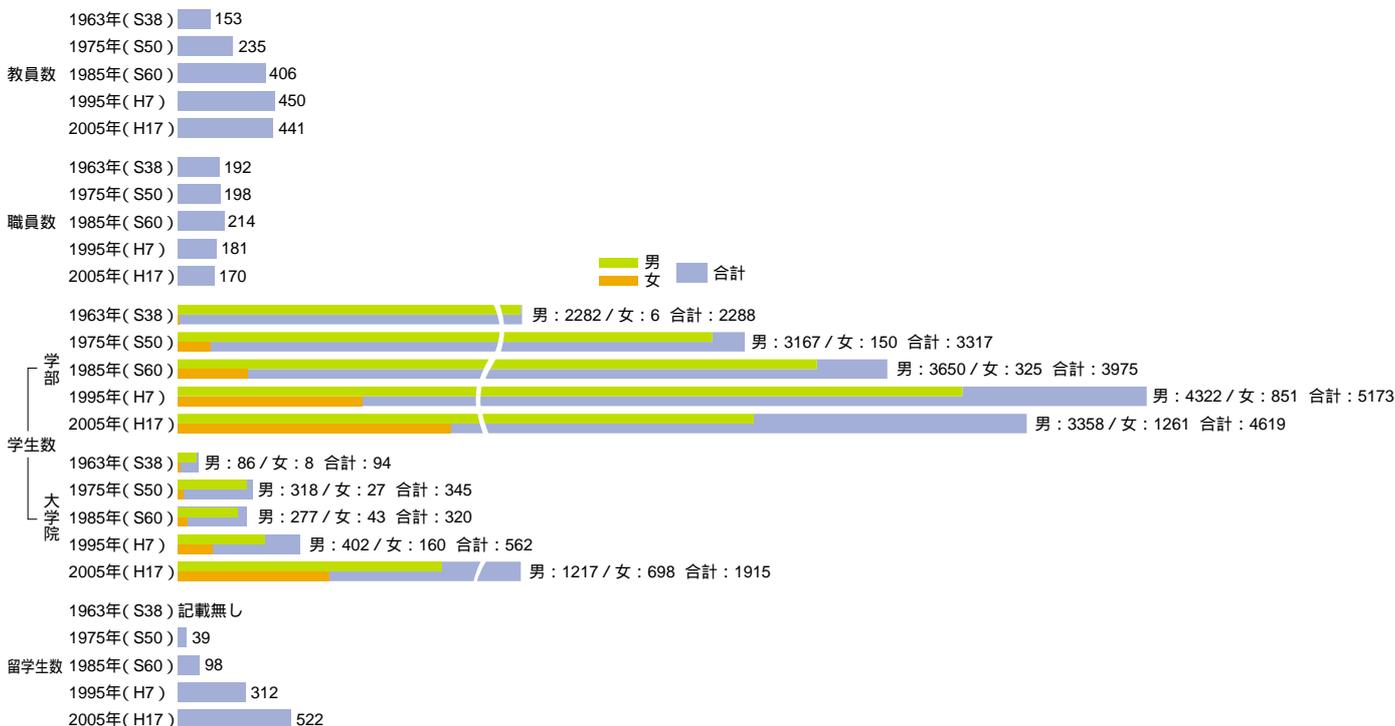
原 平日でも5時以降は、ボウリングに行ったり喫茶店に通ったり、飲みに行ったりしましたね。早く帰れる状況がありましたから、職員間の交流も密接だったのです。

市川 今ではフットサルぐらいしかありませんが、バレーボールや野球など職場のサークルがありましたね。それだけ今は余裕がなくなっているといえるかもしれません。

大神田 大学は学生と先生の世界ですから、学生や先生と接する仕事は楽しいですし、やりがいがあります。



進化する大学
ベテラン職員が見た
この40年間



40年、それは大学改革の年月でした

1940年	1949年	東京商科大学を改組し一橋大学となる。
1950年	1953年	大学院を設け、商学研究科、経済学研究科、法学研究科、社会学研究科の4研究科を置き、修士課程及び博士課程を設置する。
1960年		
	1969年	大学封鎖
1970年	1971年	保健管理センターを設置する。
	1978年	社会科学古典資料を集中的に管理運営及び収集し、社会科学研究の向上に寄与するため、社会科学古典資料センターを設置する。
1980年		
	1988年	経済研究所附属日本経済統計文献センターを改組し、日本経済統計情報センターを設置する。
1990年		
	1996年	言語社会研究科（独立研究科）を置き、修士課程及び博士課程を設置する。 学内共同教育研究施設として留学センターを設置する。 小平分校を廃止する。
	1997年	小平分館及び産業経営研究施設を廃止する。 社会学研究科に地球社会専攻（独立専攻）を設置する。 日本及び世界におけるイノベーション研究及び調査のため、イノベーション研究センターを設置する。
	1998年	経済学研究科を大学院重点化に伴い改組する。 国際企業戦略研究科（独立研究科）を置き、修士課程及び博士課程を設置する。
	1999年	法学研究科を大学院重点化に伴い改組する。
2000年	2000年	商学研究科、社会学研究科を大学院重点化に伴い改組する。 経済研究所に附属研究施設として経済制度研究センターを置く。
	2002年	法学研究科に附属の研究施設として総合法政策実務提携センターを置く。 教育・研究組織との密接な連携・協力に基づく、 国外及び国内の教育・組織研究及び専門家との研究のため、国際共同研究センターを設置する。 経済研究所附属日本経済統計情報センターを改組し、社会科学統計情報研究センターを設置する。
	2003年	国際企業戦略研究科を改組し専門職学位課程を設置する。 全学教育、教育改善及び大学教育全般のあり方に関する研究のため、大学教育研究開発センターを設置する。 情報処理システム及びネットワークシステムの整備・運用・管理と研究・教育の向上のため、 総合情報処理センターを設置する。
	2004年	国立大学法人一橋大学となる。 法科大学院（専門職学位課程）を設置する。 北京事務所を開設する。 学生相談及び就職支援を行う、学生支援センターを設置する。
	2005年	国際・公共政策大学院（専門職課程）を設置する。



40年、それは刷新の歴史でした

西キャンパス

東キャンパス

1963年 磯野研究館完成

1966年、1969年、1972年 職員宿舎完成

1966年 現・イノベーション研究センター棟、保健センター完成

1967年 第一講義棟完成

1970年 第二講義棟完成

1972年 第一研究館、西プラザ棟完成

1976年 現・社会科学統計情報研究センター棟完成

1977年 古典資料センター完成

1978年、1980年、1994年 第二研究館完成及び増築

1980年 現・社会科学古典資料センター、
現・附属図書館雑誌棟低層部完成

1981年 総合情報処理センター完成

1982年 法人本部棟完成

1994年 佐野書院完成

1996年 現・附属図書館雑誌棟低層部改修及び
増築（現・雑誌棟高層部）完成

1998年 情報教育棟完成

2000年 附属図書館本館完成

2004年 兼松講堂大改修工事終了



2006年 本館改修工事終了



1996年 東1号館完成

1996年 東プラザ完成

1997年 東2号館完成

2000年 国際研究館完成

2004年 大学院総合研究棟（マーキュリータワー）完成



「現代の貧困問題を突き詰めていくと アダム・スミスに立ち戻ることになる」

フレームとしての原理の重要性を 再認識させられる

最近、NHKをはじめとするマスコミが、盛んに貧困問題を取り上げるようになってきました。現代の貧困問題を考えると、改めて経済学とは何かという問いに立ち返らざるを得ません。

経済学は大きく全体フレームに関わる分野と、他方、その具体化・応用、或は各個別テーマ分野・パーツに分かれます。

フレームとはprinciples、つまり経済学の原理です。いわゆる経済学の大家が打ち出してきた資本主義論が、それにあたります。大家が何を打ち出してきたかという、それは「富の生産と分配」論です。これこそが経済学の基本的課題であり、フレームなのです。最初にその体系を示したのがスミス『国富論』(1776年)です。スミスによって示された資本主義経済のフレーム、原理は今日でもその意義を失っていません。

最近、私自身、スミスが中心課題とした「富の生産と分配」が、現代でも重要課題であることを強烈に再認識させられています。

スミス経済学の主張は、市場経済が発展していけば富の生産が増大し、その分配が社会の底辺にまで行き渡るという「トリクルダウン」論にあります。しかし、産業革命後、富の生産が増えても貧困問題が発生し、富と貧困の同居という矛盾が生じてきます。スミス経済学を修正・展開し、その矛盾を解明する道を開いたのがマルクス『資本論』(1867年)です。さらに、巨大企業と帝国主義の時代に入り、ドイツのR.ヒルファディングやイギリスのJ.A.ホブソンが資本主義のこの新たな段階の研究を行い、レーニンが両者の成果を『帝国主義論』(1917年)

としてまとめました。「富の生産と分配」問題は、レーニンにおいても主要課題をなしています。

現代日本の抱える課題は 結局は「富の生産と分配」だ

最近、NHKが「ワーキングプア」という質の高いシリーズ番組を放送しました。それをもとに日本の貧困問題を考えてみましょう。

まず、母子世帯、および病気失業中の父親を2人の娘がパートで養っている貧困世帯のケース。これは非正規雇用の低賃金問題に他なりません。次に、岐阜県で洋服成型を営む自営業世帯の貧困。これは、グローバル競争圧力下での下請け労働者の賃金引下げ問題であり、やはり低賃金が貧困をもたらしています。賃金問題は分配問題です。地域の貧困ケースとして挙げられた、もう一つのケース、秋田県の洋裁自営業者の貧困。これは、農業政策放棄による農業・農村の疲弊の反映であり、無年金のためアルミ缶を拾って暮らす京都の老夫婦世帯の貧困と同様、その背後には、国の政策の貧困があります。こうした日本の税・財政政策は、所得の社会的再分配問題に他なりません。最後に、若者のホームレスのケース、或は親のリストラ 非正規雇用のため高額学費に耐えられず大学進学を断念せざるを得ない生徒のケース、こうした貧困とその再生産も国の政策欠如の産物であります。

非正規雇用労働者の低賃金問題、下請け労働者の低賃金問題、農



業・社会保障・教育政策の問題、これらは、結局、富の分配・再分配の問題に他なりません。

現実の課題が解明できなくては 何のための経済学かわからない

GNP大国、日本で、飢え死にが多数発生しています。まさに、スミスが説いた、その後も経済学が長年向き合ってきた「富の生産と分配」の問題が、今なお問われているのです。

もちろん、スミスやマルクスの議論そのまま今日の貧困問題が解明できるわけではありません。課題は共通でも、(1)多国籍企業の影響力の増大、それに伴う(2)グローバル競争の激化、(3)地球環境制約の深刻化、この3点において当時の資本主義と現代とは舞台装置を異にします。この新たな条件の下でいかに富の生産と職・雇用を確保するのか。そして、海外投資収益を含めた国民所得の分配を国民生活に繋げるべく、どのように国家、社会をデザインしていくのか、現代の国富論が問われているのです。

今の政治家や官僚にはこうした問題意識が薄く、政策もその場しのぎで、国家のビジョンを示していません。スミスは、当時のイギリスにおける国富論を説き、ケインズも1920年代の大量失業を前にして新しい経済ビジョンを提起しました。

日本の政策担当者に限らず、研究者こそ、今日の貧困拡大・社会崩壊の現実に対峙し、現代の「国富論」ビジョンを示すべき時です。国民の生活保障をどう確保するか 大きなフレームでの現状把握、それに基づく政策提言が求められています。経済学は、この課題を意識し、受け止めなければなりません。

私は若いころスミスやマルクスの研究を行っていました。この数年来は、80年代以降のグローバル資本主義下の「富の生産と分配」に対する批判を行っています。最近、両者の研究の繋がりを強く意

識するようになりました。考えてみれば当然のことです。富の生産・職を確保し、得られた富を人々の生活に結び付けていくにはどうすればよいのかという問題は、スミス以来の経済学の大家が一貫して取り組んできたテーマですから…。

将来に希望が持てない層が広がり、餓死者まで出す日本社会の劣化、そこで暮らす国民の痛み・叫びをヒシヒシと感じています。それを放置し続ける政府、無視する研究者に対する怒りも感じています。私自身、これまで研究を30年近くやってきた者としての存在意義が今問われているのです。

大学の使命は 市民社会のリーダー育成だが…

教育者としての立場で大学を考えると、一橋大学の役割は、経済・政・官界、そしてなによりも市民社会のリーダーを育てることにあります。国際レベルの大学なんていうフレーズは空言葉で、中身がありません。リーダーの条件とは、幅広い視野とバランス感覚です。既存概念や権力からの精神的な自立がその前提になります。

翻って現代日本の高等教育の状況を見ると、忸怩たるものがあります。テキスト教育・教育のマニュアル化、大学本体のビジネス・スクール化、大学の法人化 = 「官僚機構の下部機関化」…。幅広い視野とバランス感覚、自由な精神を養う環境が失われています。

学生に期待したいのは、問題意識を持ち、自分と異なる意見とぶつかり、自己を確立することです。また、古典に親しむことです。時代を生き抜いた古典からは幅広い視野とバランス感覚を読み取ることができます。リーダーは、またそれなりの志を持つことが必要です。美術・芸術に接し、美意識を磨く。美意識と志は同じ空間にあります。こうした一見不必要と思われることを学ぶことでリーダーが育つのです。(談)

経済学研究科教授

福田泰雄

Yasuo Fukuda

1970年一橋大学経済学部入学、
1981年同大学院経済学研究科博士課程卒業、
1985年一橋大学経済学部講師、1992年同大学経済学部教授、現在に至る。
その間、1992年4月～1994年3月イギリス、レスター大学客員研究員。
2003年3月京都大学博士(経済学)取得。



「他者の自伝」としてポストコロニアル文学を読む

『アフリカの日々』にみる 植民地と女性

80年代にメリル・ストリープ、ロバート・レッドフォード主演で話題を呼びアカデミー賞を受賞した『愛と哀しみの果て』という映画があります。デンマーク人の主人公カレンが英国領ケニアに渡って、広大なコーヒー農場を経営するケニアでの生活をややセンチメンタルに描いたものです。

ストリープ演じるカレンのモデルとなったのは、アイザック・ディーネセンという筆名での *Out of Africa* 『アフリカの日々』(翻訳書名) という自伝的著作で知られる作家です。ディーネセンは、1910年代にケニアに渡り、コーヒー農場を経営しました。31年に経営難で農場を売り渡しデンマークに帰国してから、アイザックという男性名のペンネームで執筆活動を始めました。

ケニアでの体験を綴った自伝作品が『アフリカの日々』。この作品は時代背景を映して、帝国主義的な面が色濃くあります。ヨーロッパ女性は植民地にあっては支配者の一員であり、アフリカ人にとっては男性と変わらない存在でした。ですが、自伝の中に描かれるディーネセンは、台所で現地人の使用人と一緒に料理をするなど、男性とは違った形でアフリカ人と親密に交流しています。そうした交流をもとに語られるアフリカが、男性の行政官や人類学者が書くアフリカとはやはりどこか違うのも事実です。植民地の支配者であることと「女」であることのあいだのズレから生じる曖昧さや危機感をこうしたテキストのうちに発見するのも、批評の重要な作業なのです。

支配者の言語である英語で 創作するジレンマ

私の専門は大雑把にいえば、20世紀英語文学と批評理論、とくにポストコロニアル (postcolonial) 批評と呼ばれる分野です。ポストコロニアルとは、植民地支配以降という意味ですが、同時に植民地支配の遺産をいまだ背負い続けているという意味でもあります。植民地支配による負の遺産を、現在に生きる自分たちの問題として見つめ直そうとするのが、ポストコロニアル批評だといえます。

一般的にポストコロニアル文学と呼ばれるのは、旧植民地出身者

による英語作品です。英語は20世紀に入ったころにはすでに、ある種の「国際語」となっていました。ディーネセンはヨーロッパ人でしたが、非ヨーロッパ人であるインド人やアフリカ人にとっても、英語は思索活動や自己表現の手段になっていたのです。

もっとも、植民地支配者の言語である英語を使って創作活動を行うことには、多大なジレンマがあります。現在、多くの作家が英語で創作活動を行っているのは、英米人の読者を意識するというよりは、アフリカ、アジアといった地域のなかでも、国家の枠を越えた国際的な交流ができるからです。しかしながら、そうした「便利な」英語で書くことをあえて拒否する動きもあります。私が2000年に刊行した著書 *The English Book and Its Marginalia* の一章で取り上げたケニア出身の作家ングキ・ワ・ジオンゴは、英語での創作活動を放棄して母国語による執筆を行うようになった作家の一人です。ングキは、アフリカ人がアフリカの言語で文学を創作することを阻む言語帝国主義の壁を鋭く批判しています。民族文化が共通の言語により生成される以上、文学の言語は民族文化に貢献すべきだという考えからです。植民地支配の歴史の遺産への抵抗として生まれてきたこのような考え方を、偏狭な言語ナショナリズムとして批判すべきではないと私は思います。

ポストコロニアル文学と 「他者の自伝」

ポストコロニアル文学はしばしば、作者の人生と対応させることなくして読解できない文学だなどと考えられています。さらにはまた、インドやアフリカの作家が自分の人生を描くことは、自分の民族全体の歴史を語ることだとみなす読者も多くいます。しかしその一方で、ポストコロニアル文学には、そのような自伝性そのものに対する痛切な批判意識が秘められていることもあるのです。古典的な自伝に抵抗し、そこから逸脱しようとする自伝的テキスト。こうしたテキストを私は仮に、「他者の自伝」と名づけてみました。「他者の自伝」としてテキストを読むということは、読者の側にもそれなりの覚悟が問われます。そこでは自伝作者とは、容易には共感できない、自分とはまったく異なる経験と言語を持つ他者だからです。

現在は、20世紀前半、いわゆるモダニズム期における「自己」概念の変容に興味をもっています。たとえば、アフリカ系アメリカ人思想家 W. E. B. デュボイスの自伝的著作に注目しています。人種、ジェ

ンダー、セクシュアリティといった問題系が現代的な「自己」概念の構築にどのように関わるのか、探っていきたいと考えています。

自分の研究課題に結びつけるために テキストをどう読むか

言語社会研究科の授業では、大学院生と一緒に議論を重ねることで授業を作り上げていきます。本年度の講義では、やはり自伝をテーマに、20世紀後半以降の自伝を巡る批評・理論の概説、モダニズム期の自伝を扱いました。

大学院の私の授業を受けに来る学生のなかには、狭い意味での文学、文化研究ではなく、より社会科学的な分野、たとえば歴史や地域研究を志向する学生が多くいます。テキストを単なる「資料」として読んでしまいがちなそうした学生に接することで、テキストを読むとはどういうことなのか、あらためて考えさせられています。

一橋大学の学部生は、正直、いわゆる勝者としての体験しかしてこなかった人がほとんどですから、文学を通じて負の要素を背負った人々の生活を疑似体験し、それを想像する能力を養うことも必要なのではないでしょうか。あるいは狭義の文学ではなく、世の中のすべての事象を「テキスト」として批判的に読み、そこにどのようなレトリックが使われているかを知り、さらにはそこに書かれていないことまでも想像する訓練をするべきだと思います。(談)



言語社会研究科准教授

中井亜佐子

Asako Nakai

1992年3月東京大学人文科学研究科修士課程(英語英文学専攻)修了。

1996年3月

オックスフォード大学英文学部博士課程修了。

2002年4月より

一橋大学大学院言語社会研究科准教授。

2006年8月～2007年8月

フルブライト客員研究プログラムにより

カリフォルニア大学バークレー校にて客員研究員。

専門は英国モダニズム文学、

現代英語文学、批評理論。

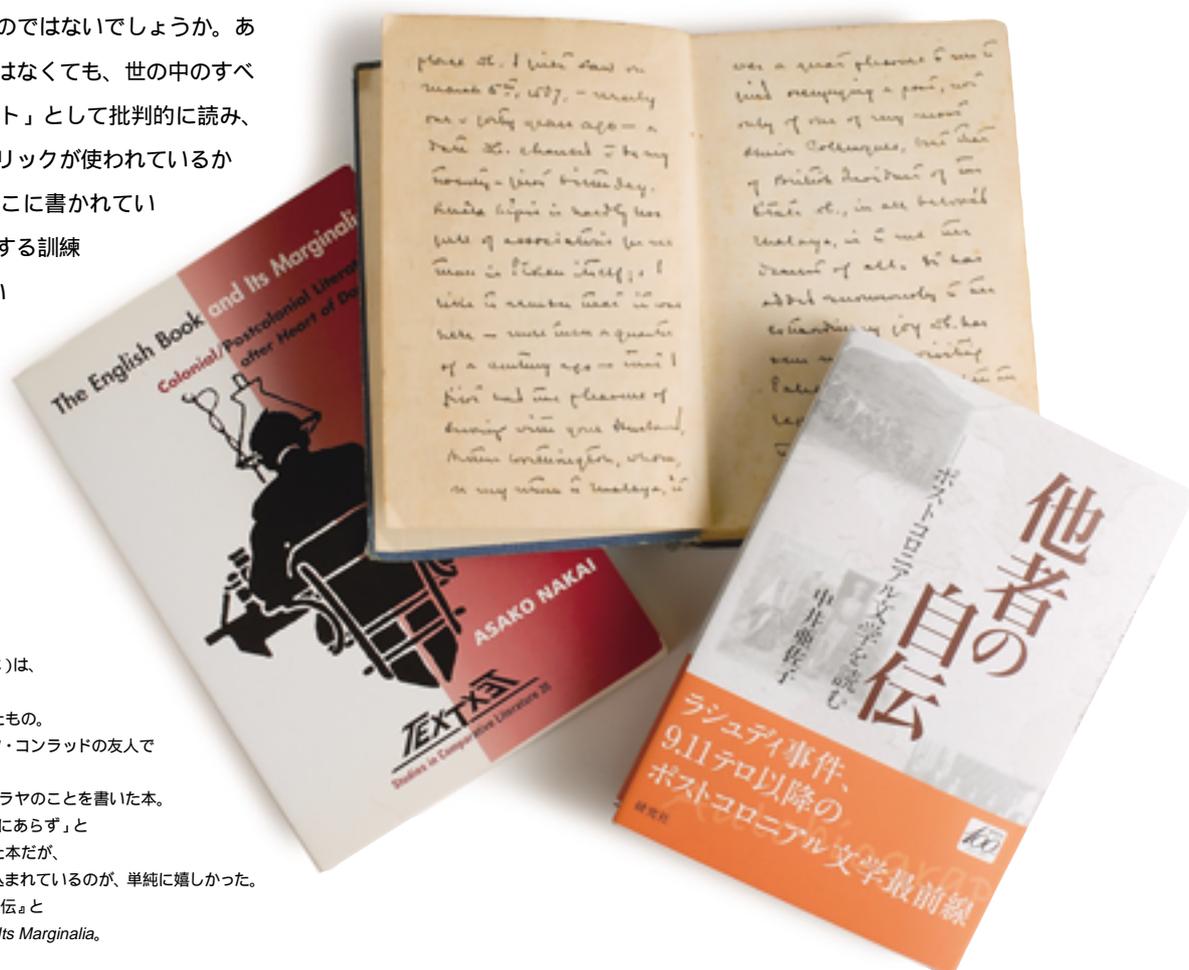
著書に*The English Book and Its Marginalia*(Rodopi)。

『現代批評理論のすべて』(共著/新書館)

『愛と戦いのイギリス文化史 1900-1950年』

(共著/慶應義塾大学出版会)

『他者の自伝』(研究社)など。



古い本(写真中:開いている本)は、

In Court and Kampong。

駒場の古書店で偶然見つけたもの。

博論で扱った作家ジョセフ・コンラッドの友人で

英領マラヤの行政官だった

ヒュー・クリフォードが、マラヤのことを書いた本。

「ジャーナリズムにして文学にあらず」と

コンラッドからは酷評された本だが、

著者実筆の献本の辞が書き込まれているのが、単純に嬉しかった。

ほかには、最近著の『他者の自伝』と

著書*The English Book and Its Marginalia*。

一橋の女性たち

各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちはいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介します。

第18回は、アメリカのラグジュアリーブランドであるティファニーで
マーケティング部門のディレクターとして活躍する島田さち子さんにお話をうかがいました。

聞き手は国際企業戦略研究科(ICS)の大園恵美です。

短期的な成長を追いかけるのではなく、
ブランドの哲学を継承しつつ、時代に合わせて発展を考える。
「らしさ」を常に意識することが大切なのです

日本ほど小売業がクリエイティブな国は少ない

大園 島田さんは、博報堂、シャネル、ティファニーと、ラグジュアリーブランドのマーケティングを専門に手がけてこられました。ラグジュアリーって何でしょうか。

島田 なくても生きていけるけれど、あると人生が楽しくなるもの。機能面ではなくエモーショナルな面で高揚感をもたらすものだと思います。たとえば、それがあるとワクワクする、非日常の気分、ワンランク上になった気持ちになれる、とか。たとえば女性が自分にジュエリーを買う時には、必ずエモーショナルな意味があると思います。

大園 今日は銀座中央通りのティファニー - 本店にお邪魔していますが、ここ銀座にはブランドショップが軒を連ねていますね。ラグジュアリーブランド市場にはどのような変化が見られますか。

島田 マーケットは世界的に好調ではないかと思います。ただ、巨大資本の傘下に入った企業もあれば、独立を貫いている企業もあるというように、経営面ではこの10年、さまざまな変化が見られます。日本での売上がワールドワイドの20~40%を占めるブランドも珍しくないので、収益性が高いので、どのブランドも日本のマーケットは非常に重視してきました。ただこれからは、日本では過去10年間の二桁成長は終わり、限られたパイの取り合いになってくると思います。某ブランドのヨーロッパの本店では、以前は一番のお客さんがアメリカ

島田さち子 (しまだ・さちこ)

ティファニー・アンド・カンパニー・ジャパン・インク
ディレクター、マーケティング
1987年、一橋大学社会学部卒。
在学中にマーケティングに関心をもち、
卒業後、博報堂に入社。
同社からシャネルK.K.などを経て、
2004年から現職。
マーケティング一筋に歩んできた
プロフェッショナルである。



カ人、次が日本人でしたが、今は一番が中国人、次がロシア人、その次がアメリカ人と日本人だという話も聞きました。

しかし、次々と銀座にラグジュアリーブランドのビルが建っていることが示すように、日本市場の戦略的な重要性は高いまです。一つには、目が肥えた質の良い消費者がいることです。日本でも本当に高いものが以前より売れるようになってきましたが、やはり特徴は、手が届くレベルの商品への需要の厚みです。これが日本市場の収益性の高さの理由でもあります。ヨーロッパ生まれのラグジュアリーブランドは、もともと一部の富裕層を対象としており、庶民は店にも行かないというかたちで発展してきました。これに対して日本はそこまでの差は少ない。お金を払えばラグジュアリーブランドに手の届くポテンシャル顧客が多いんです。日本を訪れていた業界の知人に、「日本人ほど会社に行くときや、主婦仲間のランチに、いいバッグを持って、いいものを着ていく国民はない。地下鉄で見る日本人は本当におしゃれ」と言われて、なるほどと思いました。日本には、デコルテを出したソワレで正装をし、高価な宝石を身につけて行く場がきわめて少ないけれど、その代わり日常のちょっとしたハレに頑張ってしまうのだと思います（笑）

大園 銀座で次々に建っているラグジュアリーブランドのビルは、ブランド社で一つのビルを占めていて、靴、バッグ、アクセサリ、服、オフィス機能に留まらず、中には、家具、レストラン、スパまで手がけているブランドもありますね。こういう例は世界でも珍しいのではないですか。

島田 多分、ラグジュアリーブランドのビルがこれだけ建ちならぶ光景は、世界でも銀座だけだと思います。大型の路面店はブランドイメージを発信するためのフラッグシップになります。実は、日本ほど洗練されたマーケティング手法が求められる国はないと思います。これが日本市場の戦略的重要性のもう一つの要因です。つねにお客様をワクワクさせ、ニュースを発信しつづけていかないと飽きられてしまう。

大園 消費者は新しい刺激に飛びついているだけで、別にそのブランドでなくてもいい、ブランドのもつ哲学やイメージは二の次三の次という可能性はありませんか。

島田 その側面も否定はできません。でも、日本のマーケットでの成功はある意味で先行指標になると思います。日本ほど小売業がクリエイティブな国はありませんから、普通のことをやっているでは目立たない。こうした傾向にはもちろん功罪両面ありますが、各ブランドが日本から中国を含めて、アジア全体への発信を考え始めてい



る時期ですから、日本のマーケティング手法のもつ役割は大きいと思います。

大園 ラグジュアリーブランドの成長戦略を考えると、あまり普及しすぎても非日常的なワクワク感が失われるのではないかと思います。難しい判断が求められそうですね。ビルに自社ブランドで演出するスパやレストランを加えることには、プロダクトラインを広げて成長するという狙いもあるんでしょうか。

島田 ブランドトータルの世界観を損なわないよう、ブランドのコアの部分と親和性の高い業種で成長を図るという戦略ですね。

社員はつねに「そのブランドらしさ」を意識する

大園 ラグジュアリーブランドにとって、「成功」とは何でしょうか。

島田 創業家以来のファミリー企業か、巨大グループの一員か、株式公開をしているのかといったことや、欧州出身か米国出身か、などによって経営のスタイルは違うと思います。でも共通してめざすところは、ブランドの永続的価値であり、長期に顧客に愛されながら、企業の存続・発展に必要な利益を確保していくことに重きをおいていることだと思います。

大園 オーナー企業や非上場企業だと経営者のこだわりを貫きやすいと思いますが、持ち株会社の子会社や上場企業では資本の論理が強くなるではありませんか。

島田 ラグジュアリーブランドは、大衆消費財とはハッキリ違います。経営主体のあり方によるアプローチの差はありますが、ブランドの価値や哲学を大切にするという姿勢は共通していると思います。ブランドのもつ資産をどう継承し、時代に合わせてどう発展させるかが、共通の関心事ですね。

大園 ブランド哲学の継承はどうやっているのですか。何か特徴的なことはありますか。

島田 グローバルな多国籍企業の多く



大園恵美 (おおその・えみ)

国際企業戦略研究科(ICS)准教授

は企業理念や企業価値を明文化し、共有していますが、ラグジュアリーブランドの企業は意外とそうではありませんね。たとえば、「らしさ」が何かということは一切文書化されていない。中にいる人がつねに感じ取るものであり、社員がさらに発展させていくものだという考え方です。ですから、日々の業務のなかで「らしさってなんだろう」と常に考えさせられる。「らしさ」を問われる場面が多いですし、ブランドのもつパーソナリティと資産をつねに意識しながら取り組んでいます。

これはシャネルに入ったときに体験したことですが、入社研修の環境で、パリにある創業者のココ・シャネルが住んでいたアパルトマンを訪れ、彼女の愛したものに触れる、部屋の鏡が香水瓶の蓋と同じかたちをしているとか、ブランドの本質に触れる体験をさせられます。



そうした体験の積み重ねを通してブランドを体感していくんです。ティファニーでも、入社後に訪れたニューヨークの本店の上にあるジュエリー工房で、大粒で高価な石から一点もののジュエリーをつくり出す工程を目の当たりにし、ファイン・ジュエラーとしての奥深さやクラフトマンシップを身を以て感じました。それがブランドとは何かを考えることにつながるのだと思います。

大園 ラグジュアリーブランド業界では、人材の流動性は高いんですか。

島田 業界内で動いている人が多い反面、同じ会社に10～30年勤務している人も大勢います。外資の一般的イメージよりは安定していますし、効率主義でもない。他の業界の外資系企業から転職された人のなかには、ムダが多いし、合理的指標がないと驚かれる人もいます(笑)。今後は世界レベルでの競争がさらに厳しくなりますから、

経営指標や評価基準を明確化していくことは必要でしょうね。売上や業務効率といった数字とブランドイメージのバランスをどう取っていくのか、挑戦すべき課題だと思います。

トレンド・ウォッチャーではなく、実践者として

大園 島田さんは一橋大学社会学部を卒業後、一貫してマーケティング領域を歩まれていますね。そのキッカケはなんだったんですか。

島田 大学に入学した当時は、格別、キャリア形成を意識していたわけではないんです。社会学部の岡庭ゼミで社会心理学を勉強していましたが、2～3年のときにマーケティングの授業を取り、惹かれてしまった(笑)。例えば、同じスペックの商品でもプレゼンテーションの仕方によって売れ方が違う。そこが非常に面白いと思いました。

大園 プロフェッショナルとしてキャリアを形成されていく上で心がけていることは？

島田 社会の動きに対して、つねに好奇心をもち続けることですね。人びとがどう考え、どこへ行き、何をしているのか、つねに関心をもって今日までできました。でも、時代の声をキャッチするだけではダメ。アンテナを張っているだけではトレンド・ウォッチャーになってしまいます。キャッチした時代の声を、どう自分の仕事に活かすかが大事だと思います。

もう一つ、いま改めて思うのは、人との出会い、ご縁ののちのち生きてくるといことですね。大学でのいい出会いや大学時代にふと気づいたことが、いまにつながっているなと思いますね。

大園 最後に、島田さん個人として、今後やりたいことを教えてください。

島田 もう少し自分の時間がほしいというのが正直な気持ちですね。人生は長いですから、いろんな意味で知識をつけ、さまざまなものに触れ、いろいろな場所へ行きたい。それが自分の肥やしになると思うんです。そうして歩み続けていくなかで、社会に貢献できればいいなと思っています。

大園 特に関心をもっておられる領域はありますか。

島田 個人的なレベルでは毎日の生活を充実させたいですね。花をキレイに飾ったり、アートで目を養ったり、好きなものに囲まれていく日々こそ人生ですから(笑)。仕事の面ではマーケティングをベースに自分自身をさらに発展させていきたいと思っています。

対談を終えて

企業哲学を最も効果的に継承する方法は何だろうか。ラグジュアリーブランド業界ではブランド哲学の明文化がされていない、という島田さんのお話に驚きを覚えながら、考えてしまった。ラグジュアリーブランド業

界ほど企業哲学(ブランド哲学)の継承と発展が重要な業界は、他にあまりないからだ。

島田さんは、ブランドの歴史を資料で学ぶより何より、ココ・シャネルのアパルトマンやティファニーの工房で見聞きしたことやその空気が、一番インパクトがあったという。その組織の哲学や世界観がもっとも凝

縮した場に、時には身をおくこと、その上で、日々の仕事の中で、「らしさは何か」を常に問われる、そういう働き方のくせが根付いていること、がヒントになりそうだ。その時に、企業哲学や企業価値が明文化されていないからこそ、一人ひとりが真摯に考える。「ない」から「ある」し、「問われる」から「ある」。(大園恵美)

個性は主張する

One and Only One

第 19 話

国立情報学研究所情報社会相関研究系 教授

新井紀子氏



N o r i k o
A r a i



数学が大の苦手だと思っていた。 大学入試を終えたとき 裏庭で数学の教科書を きれいさっぱり燃やしてしまった。

One and Only One

計算問題がとにかく苦手、検算なんてもっと不得意、だから数学は大嫌い。数学の先生までキライになってしまった少女は、中学高校の6年間、数学と縁を切ることばかり考えていた。理詰めで考えるのは得意な方、数学も真面目に勉強したから、ことさら成績が悪かったわけではない。だが、苦手意識とアレルギーは膨らむばかり。大学入試を終えたとき、「これで解放された！」と、自宅の裏庭で数学の教科書や参考書をきれいさっぱり燃やしてしまった。

時代に先駆けてwebベースのコミュニティ型遠隔教育システムの方法論を開発、数理論学の若手研究者として注目と期待を集める、新井紀子・国立情報学研究所情報社会相関研究系教授の、10代の姿である。

師曰く、数学の神髄は、 「計算・答」を是とするモノにあらず

「数学ギライが数学の道に進むようになったキッカケは、松坂和夫先生との出会いでした。ようやく数学から解放されると喜んでたのに、一橋大学では数学が必修。打ちのめされる思いでイヤイヤ出席した授業でしたが、松坂先生の講義は数学の神髄は「計算・答」を是とする学校数学に非ずとはっきり悟らせてくれたのです。そうだ数学には筋道というストーリーがあるんだと知ったときは、目の前がパッと開ける思いでした。

なぜ数学を勉強するんだろう。この公式は次の公式とどうつづくんだろう。数学をやるとどんな力がつくんだろう。振り返ってみると、私が数学嫌いになったのは、こうした素朴な疑問への答えが学校数学の授業からも先生からも得られなかったことに起因すると思います。やっていることの意義が見いだせないまま正しい答えだけを求められたから、強い虚しさが募って

いったのです。でも、松坂先生が求めたのは、答えではなくその道筋、あるいは理詰めモノを考えていくことをとことん追求することでした。こうなったら水を得たサカナです。理詰めモノを考えていくことは、大好きでしたし、得意でもあった。理詰めで戦える数学は、なんて清々しい世界なんだろう。面白いし、フェアでもある。ようやく自分の能力を発揮できる場が見つかったと思いました。もっとも、自分では数学はできないと思っていたのに、一橋では実はできる方だったという嬉しさも、やる気に拍車をかけていたのかもしれないね（笑）

数学は自由だ！ 大学を休学しー路イリノイへ

言われた通りをやる学校数学の呪縛から解き放たれ、新井さんは数学という広い世界へまっしぐらに飛び込んでいった。例えば判決文は主文を先に書き、次に理由を述べるという構造をもつように、法律と数学は類似性をもつが、数学の方がもっと自由だ。とことん理論を突き詰める経験を自分も一度はやってみたい。やるなら絶対、早い方がいいと、法学部在籍のまま4年生でイリノイ大学へと留学した。

「経済をやったらどうかというアドバイスももらいましたが、25年前の経済学は、欧米の理論を翻訳して学ぶスタイル。私は、数学をツールとして使うよりは、数学の世界観や自由さ、力強さそのものの方がずっと好きでした。数学という活動そのものが私の興味の対象でしたので、ロジックを学ぼうと思いました。留学先にイリノイ大学を選んだのも、基礎論グループがあって数学基礎論の研究を活発に行っていたからでした。理論はツブシがきかないし、研究者としては瀕死になる可能性があると思っていた。研究者になろうなんてまるで思わず、とにかく一年間は頑張ろうとだけ思っていました」

電車の通学定期券も持ったこともなく、ずっと自宅から自転車で行ける範囲で暮らしていた新井さん。トウモロコシ畑と大豆畑のど真ん中にあるキャンパスも、思うように進まないコミュニケーションもカルチャーショック。自分で決めたこととはいえ、余りにもかけ離れた日常に不安を感じることもあったという。だが、予定通り1年間でイリノイ大学を卒業、奨学金を得て同大大学院に進学。ティーチングアシスタントを務めながら1987年に3年の修士課程を2年で修了、博士課程への進学を前に同じ分野を専攻する新井敏康氏と結婚式をあげた。そして



1990年、新井夫妻は帰国。妊娠中の新井さんは夫の赴任先の名古屋と東京の実家を往復しながら、一橋大学に復学。長女の出産後に卒業した。

35歳にして 法学を学んだ運命に感謝した

「卒業後は、名古屋で専業主婦をしていました。30歳を目前にしたとき、やはり数学者として自分の仕事がしたいと強く思ったのです。夫の赴任先の広島で論文を完成させ、広島市立大



学情報科学部に助手として就職。数学者の道を歩かだしました。この20代後半、私は法学部にいたことを記録から抹殺したいと思いつづけていました。法学部に進学しなかったらもっと早くから数学を学んでいられた。時間をムダにしなくてすんだのにと後悔していたんです。

実はムダではなかった。法学部で学んで良かったと思えるようになったのは、35歳を過ぎてからです。周りの数学者たちは自分が見ているものが見えないらしいことに気づいたことが、コンプレックスを180度変えてくれました。というのも、数学者の多くはもともと数学好き、数を美しいと感じ、パズルとして弄ることに抵抗を感じない人たちなんです。関心の比重は純粋に数学にありますから、数学と現実の社会との接点にさほど関心がなく、社会との関わりという視点を持つことも少ないんです。でも、現実には数学的なものは現代社会の機構に深く入り込んでいます。法律という文系の学問を学んだからこそ、私はそれに気づくことができましたし、当たり前のこととして見るべきだったのでしょう。文系のバックグラウンドを持っていた自分は運が良かったと、素直に思います」

社会の機構に数学が深く入り込んでいるのは、いまに始まったことではない。普通の人々が思っているよりずっと深く、そしてずっと以前から数学は人間社会のあり方そのものと関わってきた。新井さんはその実例として、二つの挿話を教えてくれた。

法律と数学が同時に誕生した必然

「一つは旧約聖書にあるダビデの話ですね。王となったダビデは、イスラエルの民の数を数えようとして、神から罰をくだ

されました。この逸話が教えてくれるのは、古代の人にとって人口を把握するということは神の領域であったこと。そして、昔から数量を把握するということは、権力や支配の象徴であり、統治の手段であったということです。古代の人びとにとって、いつ種を蒔くかは、望みうる限り多くの収穫に、そして自分たちの生存に直結する重要な問題でした。そのための計算から暦が生まれたように、数学の歴史は何千年にもわたるリスクヘッジの歴史でもあるんですね。数学はもともと社会科学と親和性がとても高い。一橋大学で数学を重要視しているのは、理に適ったことだと思います。

もう一つの注目すべき事例は、最古の数学書である『ユークリッド原論』ですね。2500年前、古代ギリシア人だったエウクレイデス（英語名ユークリッド）は、エジプトのアレキサンドリアで数学を学び、この本を書きました。面白いのは、彼が学んだのはいわばチャート式に解法を追っていくエジプト式の数学だったのに、書いたものは定理から証明へと至る、全く異質のアプローチの書だったことです。私見ですが、この違いの背景にあるのは、ギリシアが都市国家だったことだと思います。当時のギリシアは、言語も法律も宗教や生活習慣もそれぞれ異なる都市国家の集合体でしたから、最小限これだけは納得しましょうとお互いに共通言語として使えるのは論理だけだったのだと思います。古代ギリシアで法律と数学が一緒に誕生したのは、偶然ではなく必然だったと言えますね」

数学嫌いの子供たちの目を開きたい

30代の後半から新井さんは「短期間で完結できる面白い仕事・いい仕事をやりつづけるにはどうしたらいいか」を考えるようになった。結論から言えば、ネットを媒介と



し、ある事項を面白いと思った人びとと組み、経験からくる視点と知恵を共有して何かをかたちにするプロジェクトをたくさん立ち上げることだと考えるに至ったのである。2001年、国立情報学研究所に着任した新井さんが、いま力を入れているのは、「書き言葉」でいかに知識を共有し、問題の解決を図るか、ということ。そして、そのための基盤となる論理的な読み書き能力を学校教育の中で伝えていくこと。そして、その活動に役立ち、多くの人びととの緩やかな連携の基盤となるwebベースのアプリケーション「Net Commons」の進化と普及である。

『Net Commons』は、いわばみんなで共有する机。共有知をグレードアップし、実際の仕事に活かすことができる情報共有基盤です。自分の専用の引き出しももてますし、共有机に



は数式でも画像でも置くことができます。バーチャル・デスクトップですから、どこでも仕事ができるし、ケータイからでもアクセス

できるんです。いま1500の小中学校の学校ホームページづくりに活用されていますし、2005年にオープンソースのフリーウェアとして公開以来、ダウンロード数は1万件を超えました。セキュリティを強化したバージョンをいま日本ユニシスグループと共同で開発中で、中堅中小の企業や公共団体、SOHO向けに製品化する予定です」

1500の小中学校のネットワークが、自ら体験した学校数学の問題点を是正し、子どもたちの数学嫌いの解消につながることを、そして理論的思考を体得していく契機になることを新井さんは願っている。



グローバル社会が進展する中、 数学語が大きなパワーになる

「いまロジカルシンキングが重要な意味を持つようになってきているのは、現代社会がグローバル化し、ある意味で『ユークリッド原論』時代の古代ギリシアと似た状況になっているからです。こうした時代だからこそ、共通文法としての数学語が大きなパワーとなる。いま経済学や法学など社会科学の分野でも、生き残っている研究者はほぼ例外なく数学語を体得していますね。ビジネスでも同じだと思う。グーグル社の成功はそれを象徴しています。日常の活動のなかで、数文翻訳・和文数訳できる人や企業が21世紀のグローバル化した社会の中で生き残り・勝ち残っていけるのだと思います。インターネットにはあらゆる情報があふれ、私たちはそれをデータベースとして利用することはできます。でも、演繹的に効率良く考えることは、今のところ人間にしかできないんです。

これからの時代を担う若い人たちには、ぜひ言語としての数学を身につけてほしい。少なくとも20歳以前、高校生から大学生の若者たちのために、それらを学べる機会と場づくりを実現してほしいと思います」

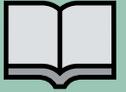
新井紀子(あらい・のりこ)

国立情報学研究所情報社会相関研究系 教授

1962年、東京生まれ。一橋大学法学部在学中に米国イリノイ大学数学科に留学。1990年、同大学院博士課程修了。同年、帰国し、一橋大学に復学、法学部卒業。1994年、広島市立大学情報科学部助手。1997年、東京工業大学で博士号を取得。2001年、国立情報学研究所に助教授として着任。2006年より同教授。現在、社会共有知研究センター長。専攻は数理論理学で、ロジックと計算理論、遠隔教育が研究テーマ。2000年10月にインターネット上で「お母さんのための算数教室」を主宰、そこから中高生のための「e-教室」が生まれた。情報共有基盤システム「Net Commons」(<http://www.netcommons.org/>)開発責任者としても活躍中。私生活では数学者の夫と一女がいる。著書に『数学にときめく』『ハッピーになれる算数』『生き抜くための数学入門』などがある。



One and Only One

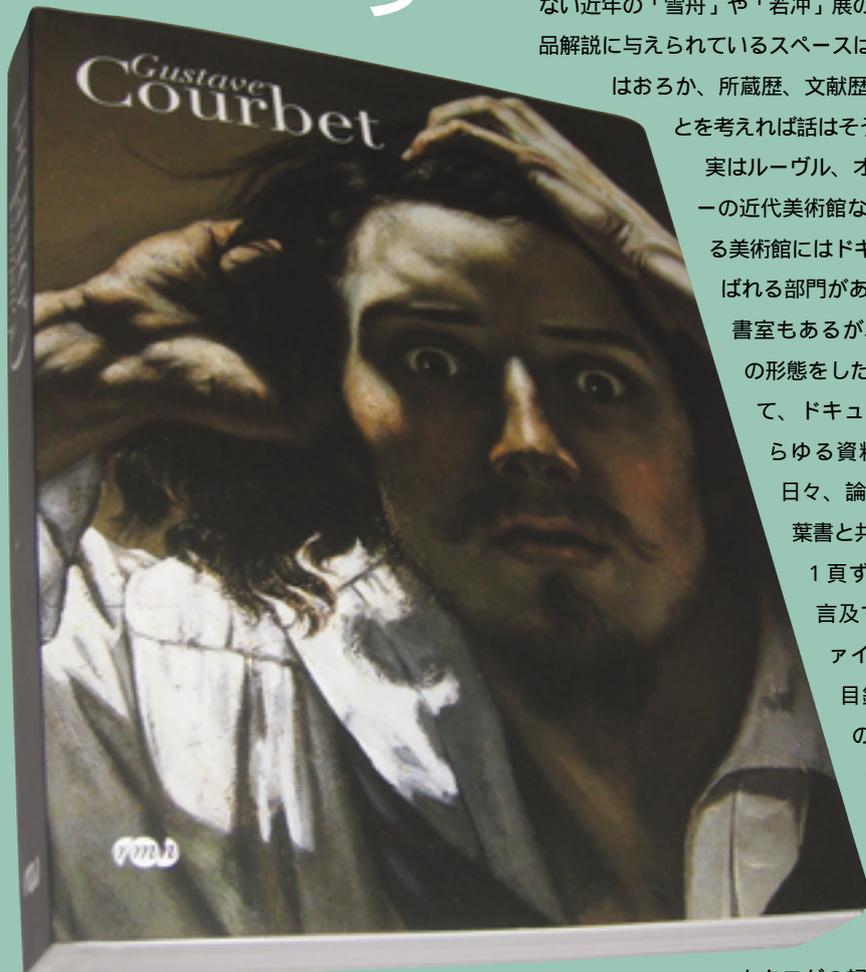


展覧会カタログに思う

学術書さながらの
パリの展覧会カタログ

11月に調査で立ち寄ったパリでは、グラン・パレを会場に大規模なクールベ展が開かれていた。ギュスターヴ・クールベは、19世紀の中頃に当時のアカデミックな画壇に挑戦状をたたきつけたことで知られるレアリズムの画家である。横6メートルに及ぶ《オルナンに於けるある埋葬の人物による歴史画》や《画家のアトリエ 我が芸術人生の7年にわたる1期間を確定する現実的寓意画》といった超大作が並んだのは、この展覧会を主催しているのが他ならぬこの2点を所蔵するオルセー美術館であるから当然ともいえるが、それでも展覧会としての迫力は圧倒的だった。精神分析学者であるラカンが所蔵していた《世界の始まり》(裸婦の下腹部のクローズアップ)の横に、同時代の同様の写真によるステレオスコープを設置したのも、近年の視覚文化的な発想を採り入れた展示としておもしろかった。だがここに記したいのは、クールベのことで展示のこともない。展覧会のカタログのことなのである。

今回の展覧会のカタログは、ほぼA4判で480頁弱。約3cmの厚さがある。出品作品が200点を超え、展覧会カタログだから1頁大あるいは見開きの図版もあるが、膨大なのは何よりも文字の量なのである。《画家のアトリエ》などは、関連作も含めるとはいえ8頁にわたり、参考図版が5点、註が36も付いている。こうした解説には新知見が含まれることも少なくはなく、つまりちょっとした学術論文になっている。更に各作品の記述冒頭には、その作品に関する詳細な所蔵歴、文献歴、展覧会歴も掲載される。



従ってこうしたカタログは、我々美術史という学問をやる人間にとっては、欠かすことのできない資料となり、その記述はしばしば論文にも引かれることになる。

アーカイブ思想の有無が、
カタログの質に表れる

展覧会が一つの学術的な作業であるならば(むしろ全ての展覧会がそうである必要はないことはいうまでもないが)これは当然というべきだろう。学芸員が自国の文化についてこうした作業をするのも当たり前のように思える。だが日本では厚さだけを比べればさほど遜色のない近年の「雪舟」や「若冲」展のカタログでさえ、作品解説に与えられているスペースは長くて半頁ほど、註はおろか、所蔵歴、文献歴、展覧会歴もないことを考えれば話はそう簡単ではない。

実はルーヴル、オルセー、ポンピドゥーの近代美術館など、フランスの主たる美術館にはドキュメンタシオンと呼ばれる部門がある。各美術館には図書室もあるが、図書室が本や雑誌の形態をしたものを扱うのに対して、ドキュメンタシオンではあらゆる資料を扱う。そこでは日々、論文の抜刷や写真や絵葉書と共に、本やカタログも1頁ずつばらばらにされ、言及する作品や作者のファイルへと分類される。目録はなく、ファイルの並べ方自体がインデックスとなった単純なシステムである。これらの資料は外部の専門家にも公開され、展覧会カタログの記述もそのような情報

集積の結果として位置づけられる。

もう気づかれたことと思うが、ここにあるのは、情報を選択せず、確実に集積し、分類保管して閲覧させるアーカイブの思想である。アーカイブに対する社会的認識が低い日本でこうしたシステムが成立しないのはけだし当然というべきか。



『ミステリーを科学したら』

由良三郎著

ナイフで心臓は一突きできない

由良三郎氏の『ミステリーを科学したら』では、ミステリー、とりわけ「リアリティ」を求められる探偵小説の中で事件が医学的な見地から見ると不可解な点が多い、ということが短いエッセイの形式でつづられている。本文では色々なトピックに関する小節があるが、一番印象に残るのは『ミステリーの医学的考証』の一節である。探偵小説の中で犯罪現場の描写として「…その左胸には短刀が突き刺さっており、切り裂かれたバジヤマには血が滲んでいた。心臓をひと突きの致命傷である」というようなものはお馴染みであるし、私もこの表現には何の違和感もなかった。しかし、由良氏はこの表現に引っかかりを感じるといふ。というのは、心臓を一突きするためにはナイフが肋骨に引っかかるからといって心臓まで到達しないとけなないのであるが、それがいかに困難なことであるか由良氏は熟知しているからである。説明すると、まず、短刀というからには果物ナイフかそれ以上の大きさのものであるから、ナイフを縦にして突けば肋骨に引っかかるし、横にしてもうまく肋骨の間を縫つようにナイフを刺さなければならぬ。従って、最初の「突きが肋骨をすり抜けるのはなかなか難しい。もし、ナイフが肋骨をすり抜けても、その勢いは胸筋で勢いが減っている上、心臓そのものは筋肉の袋のようなもので、ナイフが心臓の外側に触れるにしても、心臓を破るところまでナイフを到達させるのは至難の業なのである。なるほど、このような説明はもっともだし、だからこそ、滅多刺しなどという恐ろしい事件が実際に起こりうるのだらう。「リアリズム」を追求する場合には、このような犯罪現場の描写は問題があるかもしれない。

面白さのためにリアリティを無視する作家の苦悩

別のよくある描写としては、探偵が犯人に後頭部を殴られ、しばらく気絶するという場面である。これは小説のみならず、TVの刑事ドラマでもよく見る場面である。しかし、我々がもし、後頭部を殴られて気絶をし、意識を元に戻したら何を

するのだらう？ 病院へ行き、検査を受けるのが普通であらう。しかし、探偵や刑事は意識が戻っても病院に行くことはまずない。もちろん、頭蓋骨にはびびりも入らず、内出血も起こさず、後遺症も残らない。由良氏はこのようなハードボイルドの探偵を「ハードボンド（骨の硬い）」と皮肉っている。そういえば私が子供の頃、刑事ドラマ好きの友人とけんかすると、彼は私の後頭部をたたいて気絶させようとしていたのを覚えている。もちろん、子供の力でそう簡単に相手を気絶させることなどできないし、万が一、気絶などしていたら大問題である。

もっとも、このような事はかりを書き連ねていたらこの本にはすぐに飽き飽きしてしまっていたらう。本書の良いところは、上で挙げたようなリアリティの欠如は極力避けなければならないが、小説を面白くするためには致し方なくリアリティを無視することがあり、それは認められるべきだといふ、由良氏の持論が展開されている点である。確かに、たとえ全てを現実で塗り固めていても、何の面白みもない、推理も単純な小説などには誰も興味を持たないのだらう。要は、リアリティの追求と推理の展開・論理性・話の面白さをいかに折衷させるかがミステリー作家でもあるので、この点を痛いほど理解している。この本は決して単なる揚げ足取りで終始しているのではなく、推理小説家の苦悩やリアリティの欠如の致し方ないことも強調しており、なるほどどうなすける点も多い。一読すると推理小説の読み方が少し変わってくるようだ。この本はそんな本である。

最後に、昨今ではウルトラマンが実在したら地球の重力に本当に耐えられるか、だとか、アニメのロボットは実際にはありえない、などといった空想を科学する本があるが、本書はそんなSFものの揚げ足取りをするような本ではないことを断っておく。あくまでも「リアリティ」を求める探偵小説がテーマである。



『ミステリーを科学したら』(文春文庫)

由良三郎 / 著 文藝春秋刊 定価：460円(税込) 1994年6月10日発行(品切れ中)

『英語の感覚・日本語の感覚』

ことばの意味 のしくみ



ことばは思考や精神を映し出す鏡とも、それを見る窓ともたとえられる。ことばを手がかりに、人間の心のはたらきすなわち認知のありようを探求することに「認知言語学」は評者である私も関心がある。ここに紹介するのは、英語と日本語のさまざまな表現に、それぞれの言語の話し手の認知のありかたがどのように反映しているかを浮き彫りにする入門的な概説書である。著者の池上嘉彦氏は認知言語学、意味論、詩学、テキスト言語学の泰斗として著名な研究者である。氏にはドイツでの研究・教授歴もあり、それが本書にも生かされている。

第1章「ことばと意味」

私たちは、ある語をその語の意味に合うようなもの・ことに適用する。しかし、この原則から逸脱して語を使うこと(例えば、「雪」を初めて見た子供が「ちょうちょ」と言ってしまう)は、必ずしも誤用と排除されずに、比喩、創造的な芸術となる可能性がある。

第2章「語彙の中の意味関係」

類義語、反意語、多義語など、語の持つ意味の構造について、具体例に基づき説明される。例えば、「金星」を指す「明けの明星」と「宵の明星」は、同一の対象を異なる様相で捉えており同義ではないとの指摘など、次章の文レベルの議論への有機的な下敷きともなっている。

第3章「文法と意味」

さまざまな「文法現象」の根底に認知・意味的原理があってそれらを統率していることが例証される。行為が対象に及ぼす影響の大きさ、経験の直接性などである。ここでは影響の例を挙げる。

(1a)? The corner was turned by George. (1b) That corner hasn't been turned yet. (1a)では曲がり角は通過する場所にすぎず影響はないので受動態は不自然なのに対し、(1b)のように問題の曲がり角がマラソンの折り返し点・目標であれば、通過行為の影響が感じられるので受動態は自然だという。補足的に私見を差し挟むと、行為の対象に対する話者の心的近さ共感(empathy)が受動態の使用に反映する。(2a)太郎が次郎を殴った。(2b)次郎が太郎に殴られた。「かわいそうに」との親和性が高いのは(2b)であろう。

第4章「意味とコンテキスト」

文が「織物(textile)」のように有機的に紡がれてテキストとなる。テキスト言語学の枠で、巨視的に「民話」の構造が、微視的にテキストを形成する言語的関連性が論じられる。

第5章「意味の変化のダイナミズム」

意味変化がどのような契機によって引き起こされ、どのような過程を経て進行したかを、人間の認知的な過程との関連で説明する。メタファーに基づく変化に、例えば、人間が自己・身体を世界の中心に置いてものを見るという認知の傾向がある(leg of a desk, hands of a clockなど)

第6章「言語の普遍性と相対性」

日英語間の表現の好み・傾向の差の根底にあって、言語化の過程で働いている認知のありようの違いを豊富な例文を素材に浮き彫りにする。英語の認知の型が主客対立(他動詞性)もつする指向であるのに対し、日本語のそれは出来事全体把握(自動詞性)あるなる指向であることが例証される。(3a) I have two children. (3b) 私には子どもが2人います。(おそらく)最も当事者の意志に基づく行為の一つである「結婚」についても、日本語では「結婚することになりました」のように、主体性を薄める「なる」で包み込むことが好まれる。

第7章「ことばの限界を越えて」

ことばの詩(美)的機能をめぐって、内外の作家や詩人の文学観をも引き合いに出しつつ詩とは何かを論じる。最後に、芭蕉の句「古池や蛙とびこむ水の音」の4篇の英語訳(逐語的な訳から説明的な訳まで)を分析する。コミュニケーションの成功に関して、発信側の話し手に責任があるとする言語(欧米系の言語)と、受信側の聞き手のほうに責任があるとする言語(日本語)とがある。日本という聞き手責任の文化的環境で俳句のような聞き手責任を前提とする文学ジャンルが発達したのは偶然ではないこと、また話し手責任を前提とする言語への俳句の翻訳の孕む問題点が述べられる。

以上、なる的言い方をしてよければ、本書の概要を思いきり簡略に紹介したことになる。



『英語の感覚・日本語の感覚』

ことばの意味のしくみ』

(NHKブックス1066)

池上嘉彦 / 著 日本放送出版協会刊

定価：1,019円(税込)

2006年8月30日発行

地球の風地



域の風

in Kagoshima

200年の歴史を誇る黒酢を核にして
鹿児島発のイノベーションの風を起こす

坂元醸造株式会社
代表取締役社長

坂元昭宏氏



黒酢の醸造工場が「壺畑」。ここには日当たりを考慮して壺が並べられている。仕込みは、春と秋の年2シーズン。蒸し米、地下水、米麹を壺に入れてフタをする。



「薬局の息子？」が 一橋大学を目指した理由

私が大学進学を考えていたころ、父、坂元昭夫は薬剤師として薬局を経営していて、私は「薬局の息子」と呼ばれていました。しかし、その一方で80数歳の祖父、海蔵が、家業として伝統の製法で黒酢づくりをしていたのです。私は、そんな祖父の背中を見ながら、「ゆくゆくは自分が継ぎたい」と漠然と考えていました。

黒酢とは、米麹、蒸し米、地下水を野天に並んだ陶器製の壺に仕込んでつくる伝統的な酢のことです。仕込みから、発酵完了までの間に、麹菌、乳酸菌、酵母、酢酸菌が絶妙なバランスで作用して酢づくりを行ってくれます。嫌気性微生物が進めるアルコール発酵と、好気性の微生物が行う酢酸発酵が同一の壺の中で行われるのです。

通常の酢づくりでは、アルコール発酵と酢酸発酵は別の容器で行われます。海外からきたパイヤーは、「世界中を回っているが、こんな酢づくり法は見たことがない」と驚いていました。

黒酢の原料は米ですから、戦争中はつくるのが難しかったのですが、祖父は酢づくりの技術が喪失してしまうことを恐れて、サツマイモを代用して酢づくりを続けていました。それだけ重要な「家業」であるということが、私の意識のなかに染み込んでいたといえます。その思いが、自然と経営戦略が学べる一橋大学に目を向けさせたのでしょう。もっとも当時の一橋大学の入学試験では、数学と英語の配点が高かったので私には受験しやすかったという理由もありますが...

大学では、一橋祭の運営委員はしましたが毎日麻雀三昧で、まともに出席したと胸を張れるのはゼミぐらいのものです。榊原清則先生のゼミは、個性的でよく勉強するゼミ

テンが多く、あらゆる面で刺激を受けました。今でも毎年1回はみんなで会って旧交を温めていますし、その都度新たな刺激を受けています。ちなみに、商学研究科の沼上幹教授も同期生の一人です。

キッコーマンの成功を 目の当たりにしたアメリカ旅行

大学時代には数回アメリカを旅行しました。驚いたのが、典型的な日本の調味料であるキッコーマン醤油がアメリカに根付いていたことです。

「酢は、原料が違っていても世界中のどこでも使われている」「黒酢を武器に世界進出ができそうだな」など、さまざまな思いが頭を駆け巡りました。大学3年のころには、鹿児島に戻って黒酢の全国展開・海外展開をするにはどうしたらいいかと、具体的にイメージし始めました。

「醤油にできたことは、黒酢でもできる」と考えたのです。そこで、自分なりに整理するために、卒論として『キッコーマンの海外戦略』をまとめました。

また、アメリカ旅行中に大きなインパクトを受けたことで、「実際に住んでみて、アメリカ生活を体験したい」と思うようになってきました。短絡的ですが、「それには留学しかない」と考えたのです。黒酢の海外展開の戦略を考えるという大義名分もあります。こうして、コネチカット州の大学でMBAを取得することになったのです。

このアメリカ留学で、日本や日本人の立ち位置といったものが見えてきました。文化の素晴らしさ、とりわけ食文化の魅力が改めてわかってきたのです。豊かな食文化が津々浦々に広がっているという環境の中にこそ、大きなチャンスが広がっていると思いました。

帰国してからは、大阪の医薬品卸会社で3年間サラリーマン生活を送っています。しかし、「黒酢を世界に広めたい」という思いが強くなりましたから、3年間でサラリーマン生活を卒業して鹿児島に帰ったのです。

古くて新しい 「坂元のくろず」の秘密

私がこれほど黒酢にこだわっている理由を知っていただくために、「坂元のくろず」について簡単に紹介しましょう。



1800年頃には、福山（鹿児島県霧島市福山町）の地では、酢づくりが行われていました。なぜ栄えたか？その理由は、この福山という地があらゆる面で酢づくりに適した環境を備えていたからだといわれています。ここには、年平均18.7という酢づくりに適した温暖な気候があります。そこに良質な原料を入手しやすいという立地条件が加わりました。水は、始良カルデラから良質な地下水を得ています。また福山港は古くから米の集散地であったことから、原料米の入手が容易でした。また「くろず」のシンボルともいえる壺は、薩摩焼です。

第二次大戦前で24軒の黒酢醸造会社がありました。ところが、戦中、戦後にかけて原料となる米の入手が困難になり、安い合成酢が広まったことからほとんどが廃業してしまいました。

しかし、前述のように祖父は黒酢づくりの技術が失われることを恐れて、サツマイモを米の代用品として黒酢づくりを続けたのです。ちなみに、米を原料とするより手間はかかりますが、サツマイモでも美味しい酢はつくれます。サツマイモ黒酢を限定醸造して発売したときは、すぐに売り切れてしまいました。

とはいえ、当時は黒酢の先行きが見えないこともあって、

祖父は父には「家業を継がなくていい」と言っていました。そこで父は薬剤師になり薬局を開業したのです。

その薬局が国立鹿児島病院に隣接していたことが、黒酢づくりに大きな影響を与えました。そこに父の高校・大学の先輩たちが勤務していたことから、さまざまな症状の患者さんに黒酢を飲んでもらうことができたのです。すると、五十肩や糖尿病などさまざまな病状に効果が表れました。調味料としてばかりでなく、健康食品としての黒酢のフィールドが広がっていったのです。

大学の先生に成分分析を依頼すると、黒酢には通常の米酢の10～20倍もの豊富なアミノ酸や有機酸などが含まれていました。しかも、コレステロールなどの脂質の代謝機能を改善したり、赤血球の変形能を高めて血液をサラサラにしたり、血糖値を下げたりする機能があることがわかってきたのです。こうして、本格的に黒酢づくりを行うようになり、終戦前には約700本だった壺畑の壺は、現在では5万2000本にまで増えてきました。

なお、「黒酢」という名称は1975年に商品名として採用したものです。それまでは、伝統製法の酢を「天然米酢」と呼んでいました。商標登録をしなかったため、いまでは「黒酢」は普通名詞となっています。しかし、それが黒酢の



蔵元忠明工場長は、「壺1本1本が自分の子どものようなものです。顔色を見ながら育てていきます」と言う。毎日壺の蓋を開けて竹の棒で「顔色を見る」。色を見、においを嗅ぎ、壺に耳を当てて、発酵の状況を判断する。まさに「五感を総動員して子どもの健康診断をする」のである。



一人前の職人になるには5、6年かかる。特に発酵状態の手本となるような壺には、小石を乗せておく。製造上の注意を促すばかりではなく、若い職人が勉強できるようにする工夫である。



普及にはかえってよかったのかもしれません。

1977年には株式会社にして、本格的に製造強化を進めています。ちなみに、1991年には農林水産省の「ふるさと認証食品」(Eマーク)を全国第1号として認証されました。また、2003年には農林水産省登録認定機関から「有機農産物加工食品(有機JAS)」製造の許可を受け、2006年には財団法人食品産業センターから「本場の本物」マークの第1回目の認定を受けました。さらに、福山工場はISO9001:2000を取得しています。

苦勞に苦勞を重ねた 醸造用壺5万2000本への軌跡

苦勞談として父から聞いているのが、壺の手配です。壺は1つ54リットルの容量があるという大きなもの。200年前から薩摩焼のものを使用していました。ところが、今では薩摩焼ではまとまった量の壺を焼くことができないのです。そこで父は、薩摩焼のルーツともいえる韓国に壺の見本を持ち込んで試作してもらいました。また台湾や国内各地の窯元にも焼いてもらいました。こうした試行錯誤の結果、信楽焼のものが最適ということになったのです。5万2000本の

うち薩摩焼が約2000本、主力が信楽焼で、韓国製、台湾製の壺もそれぞれ1万本ずつです。

なお、壺は使えば使うほど馴染んできていい壺になります。新しい壺には熟成中の黒酢を入れて馴染ませますから、使用できるようになるには数年かかります。つまり、どんなに需要が高まっても、黒酢を一気に量産することはできないのです。

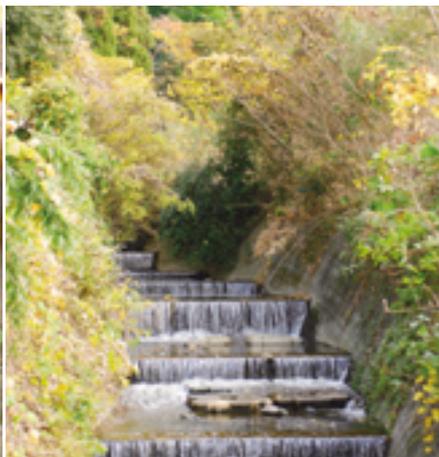
同様に壺畑となる土地探しも大変でした。「坂元のくろず」は、年間平均気温18.7の温暖な気候、地中に含まれる微生物、良質な地下水……といった環境に恵まれた福山町が醸造に一番適しています。そこで、地元空き地が出るたびに入手するといった対応しかなかったのです。

国際化への布石着々 三つ星レストランでも採用

黒酢の醸造には最低でも1年間かかりますし、壺畑はなかなか広がりません。職人も育成しなければなりません。海外に販路を広げたいと思っても、黒酢の醸造には限界があったのです。実際に黒酢がマスコミにとり上げられるようになってくると、注文が殺到してすぐに品切れになってしまいました。とりわけ5年前には、品不足で困ったものです。とても海外にまで目を向ける余裕はありませんでした。

ようやく一昨年ごろになって海外に輸出できるようになってきました。すでにハワイや台湾、シンガポール、香港に製品を輸出していますが、昨年はニューヨークの食品の展示会に出品しました。その成果があって、ニューヨークの三つ星レストランから「坂元のくろず」をレシピに使いたいとの話を受けています。良いものには国境はありません。世界のどこでも評価されるものです。

壺は信楽焼が中心で、200年以上使用している薩摩焼(耳付:写真左)のものと韓国、台湾製(黄土色:写真右)のものがある。大きさは、高さ約62cm、口径約14cm、胴径約40cmで3斗(54リットル)入り。200年前と同じサイズである。





酢としての位置付けは、イタリアのパルサミコ酢ほど高級志向を目指さず、健康志向の人向けにアピールすることを意識しています。その意味でも、市場規模が大きく健康志向の強いアメリカ市場が、ゆくゆくは大きなターゲットになるでしょう。

ゼミで学んだキーワード 「イノベーション」

ずっと鹿児島にいと見えなことがあります。東京での学生生活とアメリカ体験で、見えてきたものがありました。黒酢ばかりでなく足下には競争力のある素材が転がっているのです。気づかなければ宝の持ち腐れです。こうした素材を発掘して、外に目を向けながら会社を発展させていけば、地方の活性化につながっていきます。

大学では榊原ゼミに所属、3年次に先生がマサチューセッツ工科大学（MIT）に転じたため、4年からは野中郁次郎先生に指導を受けました。こうしたゼミやビジネス体験を通じて得たキーワードは、「イノベーション」です。

イノベーションというとハイテクをイメージしがちですが、どんな世界でもイノベーション（新機軸の発掘・展開）は欠かせません。一橋大学には、消費者に近いビジネスのイノベーションに目を向けてもらいたいと思っています。学者や研究者には「食文化」「地方」を活性化させるような研究を進めていただきたいですね。

なお、如水会鹿児島支部には約100名の会員がいます。その1割はビジネス転勤族ですが、残りは地元の人たちです。インターネットや各種ロジスティックの発展により、東京を経由せずに世界に発信できるようになりました。地元の人たちは家業を継いだり事業を興したりしている人が多い

ですから、「地方発のイノベーション」「地方から世界に発信する軸」となり得る存在といえるでしょう。

日本人はもっと自分たちの食文化に誇りを持って、海外に出て行ったらいいと思います。これからも「食のイノベーション」を意識していきたいですね。

昨今、「産業観光」という概念が注目されています。これは、歴史的あるいは文化的価値のある産業文化財や生産現場そのものを観光資源としてしまおうというもの。坂元醸造では1998年に「くろず情報館 阿萬屋」をオープン、2006年にはそれを「くろず情報館 壺畑」と拡大してリニューアルオープンしています。年間10万人を超えるお客様が観光バスや自家用車で訪れてくれますから、地域活性化に多少なりとも貢献していきたいと考えています。

坂元昭宏（さかもと・あきひろ）

1959年生まれ。1978年鹿児島県立鶴丸高校卒業。1983年一橋大学商学部卒業。1986年アメリカ・コネチカット州ハートフォード大学経営大学院修士課程修了（MBA取得）、1986年10月～1989年9月日本商事株式会社（現アルフレッサホールディングス株式会社）勤務。同年10月さかもと薬品株式会社常務取締役及び坂元醸造株式会社常務取締役就任。1998年5月坂元醸造株式会社代表取締役副社長就任。2003年5月坂元醸造株式会社代表取締役社長就任、現在に至る。



「くろず情報館 壺畑」前にて

1992年には福山工場内に研究所を設立。酸度や窒素値など黒酢の成分分析を行うほか、新製品開発にも取り組んでいる。

「くろず情報館 壺畑」館内

「くろず情報館 壺畑」館内



一橋大学基金へのご協力、 心より御礼申し上げます。

卒業生、在学生の保護者・ご家族の方をはじめとした皆様からご寄付をいただき、2008年2月末現在で、総額約14億8,000万円に達しました(うち2億円は、創立125周年記念募金より繰り入れ)。この場をお借りし、皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

ご寄付をいただきました方々へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、2007年12月11日から2008年2月10日までの間にご入金を確認させていただいた方を公表させていただきます。公開不可の方、本学役職員につきましては掲載しておりません。また、ご寄付者が万が一お名前がもれている場合につきましては、誠に恐縮でございますが、基金事務局までご連絡下さい。

ご寄付をいただいた方すべての皆様を「一橋大学基金寄付者芳名録」に記し、一橋大学の歴史に永く留めさせていただきます。また、30万円以上(法人100万円以上)のご寄付に関しましては、ご芳名を本館設置の「一橋大学基金寄付者銘板」に記させていただきます。



なお、募金目標額は100億円となっております。皆様の一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

ご寄付のお申し込みについて

お手紙・ファックスまたはお電話で、ご住所とお名前をお知らせください。基金事務局より、ご案内、寄付申込書および払込用紙をお送りいたします。

一橋大学基金ホームページより、クレジットカードによるお申し込みも受け付けております。トップページ上方の「ご寄付のお申し込み」メニューからお進みください。

一橋大学基金ホームページ <http://www.kikin.ad.hit-u.ac.jp/>

如水会会員証カードをお持ちの卒業生の皆様へ 分割ご寄付のご案内

一橋大学基金では(社)如水会と連携し、如水会会員証カードによる分割ご寄付の受け付けを開始いたしました。

お申し込みいただきますと、如水会会員証カードから定期的に自動払い込みにてご寄付を頂戴することとなり、お振込の手間を省くことができます。

また、ご寄付の回数は、年1回(8月または2月)と年2回(8月および2月)よりお選びいただけます。如水会会員証カードをお持ちの卒業生の方はぜひご検討ください。

詳しくはホームページをご参照いただくか、または下記までお問い合わせください。

[お問い合わせ先]

一橋大学基金事務局

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL/FAX: 042-580-8888 E-mail: kikin@ad.hit-u.ac.jp

[ご寄付者ご芳名] 五十音順に掲載させていただきます。

卒業生

320名・3団体(29,141,000円)

ご寄付金額

100万円以上	50万円以上 100万円未満	50万円未満
24名・1団体	15名	281名・2団体

池内光久 様	五十川寛章 様	青柳隆弘 様
今井久雄 様	井爪輝明 様	浅井吾子登 様
江頭邦雄 様	瓦林秀嗣 様	浅尾武久 様
大軒由敬 様	小見山 岳 様	浅野孝志 様
岡島進一郎 様	進藤孝生 様	浅羽徹明 様
加藤武雄 様	関 統造 様	浅見英男 様
木村希一 様	寺本隆一 様	芦谷政男 様
小寺喜一郎 様	富田 健 様	足立吉正 様
鈴木壮治 様	百瀬雄次 様	安部正弘 様
辻田文也 様	山本千里 様	天野 馨 様
鶴野史朗 様	吉野賢治 様	荒木邦起 様
西川莊二郎 様	渡辺和紀 様	有澤広之 様
藤木隆三 様	他 3 名	飯沼賢一 様
萬田貴久 様		井口祐介 様
嶺 英俊 様		池口徳也 様
宮坂真也 様		池田成樹 様
村田正雄 様		石坂明彦 様
茂木賢三郎 様		石田大輔 様
安井 明 様		石田尚道 様
山崎建人 様		石原 滋 様
渡辺 亨 様		伊集院 正 様
千秋会		石渡隆介 様
(昭和19年商学専門部・		和泉孝斉 様
教員養成所入学又は22年卒業生) 様		井戸武一郎 様
他 3 名		伊藤謙平 様
		伊東晋志 様
		伊藤照夫 様
		伊藤正徳 様
		伊藤宮樹 様
		井上晶智 様
		井上登志仁 様
		揖斐洋一 様
		今井祐子 様
		岩田宜久 様
		上澤隆信 様
		上田憲太郎 様
		上田修平 様
		上野 求 様
		牛山啓二 様
		歌川 毅 様
		浦壁隆雄 様
		浦田金吾 様
		恵谷英雄 様
		遠藤恒二郎 様
		大石晃慶 様
		大久保光晴 様
		大島道雄 様
		大塚宣征 様
		大塚善種 様
		大橋茂一 様
		大橋 高 様
		大原良太 様
		大美賀 良 様
		大山雄介 様
		岡 精一 様



銘板色

【ブロンズ】

個人: 30万円以上

法人: 100万円以上

【シルバー】

個人: 100万円以上

法人: 500万円以上

【ゴールド】

個人: 1,000万円以上

法人: 5,000万円以上

【プラチナ】

個人: 3,000万円以上

法人: 1億円以上

(金額は累計)



岡 大輔 様	佐川健太郎 様	田脇由夫 様
岡田英毅 様	櫻井 榮 様	千田勇一 様
岡安敏夫 様	佐々木明久 様	塚元佑樹 様
小川太郎 様	笹谷隆美 様	津田弘継 様
奥 秀人 様	佐藤 淳 様	辻 泰彦 様
小野 章 様	佐藤輝彦 様	辻本隆之 様
小原與一郎 様	塩崎昌弘 様	土田将夫 様
小柳津好司 様	重信顕治 様	鶴田 雄 様
小山公康 様	柴田 亮 様	鶴巻 暁 様
小山益広 様	芝山健悟 様	寺田勝彦 様
織原平吉 様	渋谷鋭市 様	徳永正剛 様
海瀬兼一 様	清水宏一郎 様	戸田陽一郎 様
笠原拓郎 様	清水 稔 様	豊原寛和 様
菓子 清 様	清水義昭 様	永井 威 様
梶浦卓哉 様	下條聡士 様	長江雄平 様
梶野 浩 様	下田和夫 様	中川勝敬 様
柏本一宏 様	下田祥朗 様	中澤寛之 様
片桐忠孝 様	下村大介 様	中島一雄 様
片柳 茂 様	城 裕也 様	中田敦之 様
加藤高博 様	小路卓史 様	中野勝弘 様
加藤 剛 様	正野雄一郎 様	中村誠広 様
加藤直人 様	白石武夫 様	中村 達 様
加藤弘毅 様	白潟 大 様	西川 雅 様
加藤幸弥 様	白川友彦 様	西木 隆 様
上遠野 護 様	白土将志 様	西村 晃 様
金高 望 様	新 悟 様	西村義行 様
金谷芳郎 様	菅原 隆 様	新田晴男 様
加野 忠 様	杉江 徹 様	根本直人 様
加納誠三 様	杉本 亮 様	野崎晃生 様
唐川光彦 様	鈴木章夫 様	能勢国生 様
河合信義 様	鈴木 勲 様	野萩 互 様
川村 進 様	鈴木堅司 様	野間口嘉行 様
神林祐一 様	鈴木武之助 様	野村勇雄 様
神原太一 様	鈴木 保 様	蓮見俊夫 様
菊竹崇宏 様	瀬戸隆一 様	長谷川哲也 様
岸田佳子 様	副島英雄 様	長谷川暢洋 様
吉川順一 様	高場俊明 様	旗野友夫 様
木村正昭 様	高橋幹男 様	羽石真二 様
久保一郎 様	高橋善行 様	馬場浩史 様
黒田 誠 様	高橋理英 様	早坂征治 様
桑名基典 様	高間雄二 様	林 耕司 様
兼定十起彦 様	高山卓也 様	林 智雄 様
神代祥男 様	竹内健蔵 様	林田哲也 様
国分 剛 様	竹上幸次郎 様	原 謙太郎 様
越野靖之 様	竹島周作 様	原島将光 様
小島 剛 様	武山源三 様	原田 隆 様
小島光正 様	舘 泰史 様	平井章夫 様
小林俊敦 様	田中秀征 様	平岩益夫 様
小林迪之 様	田中政彦 様	平塚 崇 様
今 真一郎 様	田中洋祐 様	平野 鍾 様
近藤篤正 様	谷 勇一郎 様	平野 真 様
近藤基樹 様	田上道隆 様	路谷俊雄 様
齊藤純雄 様	田林宏章 様	藤井智朗 様
齋藤 平 様	田巻 聡 様	藤田光郎 様
榊 修三 様	田村 稔 様	藤本淳三 様

在学生の保護者・卒業生のご家族

11名(850,000円)

越智謙二 様
 嶋田敏明 様
 千束恭弘 様
 永野博司 様
 藤田雅樹 様
 三浦耕造 様
 宮城義信 様
 山口公一 様
 渡邊太門 様
 他2名

企業・法人等

14団体(46,080,000円)

アイオクト株式会社 様
 味の素株式会社 様
 エクソンモービル株式会社 様
 大阪ガス株式会社 様
 オリエンタルフローリスト株式会社 様
 株式会社協和 様
 キリンホールディングス 様
 株式会社きんでん 様
 中外製薬株式会社 様
 トヨタ車体株式会社 様
 株式会社ニチレイ 様
 株式会社博報堂 様
 一橋大学消費生活協同組合 様
 株式会社村田製作所 様

本学役職員

7名(1,230,000円)

26千秋会(昭和26年卒門養会) 様
 昭和31年入学N組喜久会(二木会) 様
 他11名

マイクロソフト社協賛国際シンポジウム、 「知財の法と経済学」を開催しました Symposium on Law and Economics of IP



日時：2008年2月18日（月）13：00～17：45

主催：一橋大学

協賛：マイクロソフト株式会社

コーディネータ：青木玲子経済研究所教授

《プログラム》

開会の辞



保岡興治氏
元法務大臣・衆議院議員



ジェフリー・マン氏
(Geoffrey Manne)
Microsoft Academic Relations Manager
(Law and Economics)



杉山武彦
一橋大学長

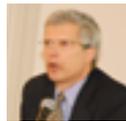
第一部：Digital Information and Intellectual Property



スザンヌ・スコッチマー氏
(Suzanne Scotchmer)
カリフォルニア大学バークレー校経済学および公共政策学教授
テーマ：「デジタル ライツ マネジメント」



玉井克哉氏
東京大学先端科学技術研究センター教授
テーマ：「情報と知財・消尽について」



スティーブン・マウアー氏
(Stephen M. Maurer)
カリフォルニア大学バークレー校ゴールドマン公共政策情報と安全プロジェクト・ディレクター
テーマ：「オープンソース」

第二部：Frontiers of Research on IP and Alternatives



ジャネット・ホープ氏
(Janet Hope)
オーストラリア国立大学 Regulatory Institutions Network ARC Fellow
テーマ：「オープンソースとバイオテクノロジー」



武藤滋夫氏
東京工業社会理工学研究科教授
テーマ：「知財ライセンスのゲーム理論的分析」



長岡貞男
一橋大学イノベーション研究センター教授・所長
テーマ：「知財の試験・実験例外による運用」



スコット・キーフ氏
(F. Scott Kieff)
ワシントン大学ロースクール教授
テーマ：「知財の新しいアプローチ」

本学キャンパスが、TBSドラマ「エジソンの母」の 撮影ロケ地として使用されました



子供の教育のあり方をテーマにしたTBSドラマ「エジソンの母」(2008年1月11日～3月14日オンエア毎週金曜日22時放映)のロケ地として本学西キャンパス及び西キャンパスのカフェテリアが使用されました。映像作品のロケ地として本学を開放するのは、ひさしぶりのことです。全国の視聴者のみなさんに、一橋大学キャンパスの美しさを知らせることができたのではないのでしょうか。今後もテレビやスクリーンで、思いがけずキャンパス風景を目にする機会があるかもしれません。

主な出演者：伊東美咲、坂井真紀、谷原章介、清水優哉（子役）、細田よしひこ、伊藤正之、堀部圭亮、山中聡、安田顕、上村香子、田中要次、杉田かおる、松下由樹 ほか



一橋大学キャンパスの使用にあたって

株式会社ドリマックス・テレビジョン 制作部 **奥村謙介氏**



企画があがってきて、ドラマの主要ロケ地が大学であることを知り、複数の大学を候補地としてリストアップしました。制作サイドの最初の映像イメージは、近代的な大学ということでしたが、一度伝統校も見てみようということで、一橋大学を見学させて頂きました。一橋のキャンパスはとも美しく、また兼松講堂や図書館などは、近代的な建造物とは違う重厚

さがありました。映像監督に写真を見せて相談したところ、「ぜひ使いたい」ということでしたので、大学広報に相談させて頂きました。検討を快諾して下さい、今回の撮影に至りました。ドラマにとってロケ地は全体の雰囲気を作り上げるうえでとても大切な要素です。今回一橋大学を使わせて頂いたことにも感謝しています。

第3回ホームカミングデー開催のお知らせ

昨年、一昨年に引き続き
今年はさらに魅力的な企画を用意して
緑萌えるキャンパスで第3回ホームカミングデーを開催いたします。

開催日：平成20年5月10日(土)

開催場所：国立西キャンパス

主なイベント

記念式典	優秀学生表彰
記念講演会	松本恒雄 大学院法学研究科教授
福引抽選会	
学生参加行事	応援部、学生音楽会、 一橋祭運営委員会(キャンパスツアー)、 茶道部、華道部、淡成書道会発表 ほか
図書館記念展示・館内見学	一橋大学の学問史およびコレクションの紹介を 中心とした記念展示を開催します。

学長ご招待者

すべての卒業生の皆様を歓迎致します。なお、会場の都合上、
本年度は下記の周年に当たる方々を学長ご招待と致します。

昭和28年卒業(卒業後55周年目)
昭和33年卒業(卒業後50周年目)
昭和38年卒業(卒業後45周年目)
昭和48年卒業(卒業後35周年目)
昭和58年卒業(卒業後25周年目)
平成5年卒業(卒業後15周年目)
および各年次学部卒業生と同年代に入学された
OB・OGの方々。
ご家族も是非ご一緒においでください。

なお、ご招待年次以外の皆様ご参加の場合は担当までご連絡ください。

詳細はホームページにて随時お知らせします。
<http://www.hit-u.ac.jp/> をご参照ください。

【お問い合わせ先】

一橋大学総務部総務企画課 TEL：042-580-8010 FAX：042-580-8006

一橋大学広報誌「HQ」

編集発行
一橋大学HQ編集部
編集部長
副学長(社会連携・財務担当) 山内 進
編集長
言語社会研究科教授 坂井洋史
編集委員
商学研究科准教授 山下裕子
経済学研究科教授 福田泰雄
法学研究科准教授 山田 敦
社会学研究科教授 足羽與志子
国際企業戦略研究科准教授 大上慎吾
経済研究所准教授 阿部修人
外部編集委員
有限会社イブダワークス 吉田清純
印刷・製本
藤庄印刷株式会社
お問い合わせ先
一橋大学学長室広報担当
〒186-8601 東京都国立市中2-1
Tel：042-580-8032 Fax：042-580-8016
<http://www.hit-u.ac.jp/>
koho@ad.hit-u.ac.jp
ご意見をお寄せください。
一橋大学学長室広報担当 koho@ad.hit-u.ac.jp
本誌掲載の文章・記事・写真等の
無断転載はお断りします。

広告掲載お問い合わせ先
一橋大学学長室広報担当
042-580-8032

編集部から

4月、一橋大学の新入生たちは、まず26の「クラス」に分かれます。1クラスは約40名。4学部の学生が交ざり、入学後の1～2年間は、語学や体育の講義でほぼ毎日、顔を合わせます。いづつ始まった制度なのかもしれませんが、小生が入学した二十数年前には、すでにありました。

もともと学部間の垣根が低い一橋大学ですが、このクラス制度が、大学時代の交友関係をいっそう広げてくれます。専門分野や興味に応じて集まるゼミやサークルとは、ひと味違った出会いの場。小生の場合、今でも折に触れて集まるクラス時代の仲間9人は、4学部にまたがり、仕事も商社マン、銀行マン、TV記者、経営コンサルタント、法務、会計士、証券マン、起業家、そしてしがらない大学教師と、さまざま。

昨今は大学の競争力がいろいろと比較されていますが、「生涯の友人づくり」の競争力で、一橋大学は世界でも有数といえないでしょうか？(山菜)



Hitotsubashi Quarterly

春号 April 2008 Vol.19